WASUN
HQ
1104
J74

Nov. 1899
no. 500

明治三十二年十一月二十五日

女學雜誌

第五百號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百號目次

◎社說
學校系統問題

◎講義
黑死病談（布川靜淵）

◎評論
幽靈の電氣學的說明（青柳有美）
（ポーテンシャルの差は幽靈を呼起すもの也）

◎大磯だより
中島湘煙女史談話（青柳生）

◎女學
痴漢駿馬に跨り、佳人醜夫に侍る
男子の無
教育界の惣失敗

◎雜錄
海舟先生高談
永源寺遊記（岩野泡鳴）
詣を熱海のさまよひ日記（有夫）
迷鄕（天行雲士）

◎隨感
無我無慾なる大不平家○優しき乙女心中の不平○冷性熱血

◎寄書
黃吻錄（舟畔生）

◎新刊書
（海舟遺稿）○平民之福音○小說にごり水○經當世活人諧）

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を事にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗敎及び敎育等に對する吾輩の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

女學雜誌定價表

	前金
壹冊定價	拾錢
半年分定價	壹圓拾錢
一年分定價	貳圓

（內國 無郵稅）

◎代金は惣じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は惣て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ甚だ不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かれて御承知被下度候

廣告料	
一行（廿二字詰）一回	前金拾錢
同 三回以上	一割引
同 六回以上	二割引

送金 送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるる人は惣べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年十一月廿四日印刷
明治三十二年十一月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
（電話番町十九番）

松村介石新著

修養錄

定價四十錢
郵稅六錢

予立志之礎を著してより既に十年の星霜を經、劣才自ら勵むと雖も智行に伴はず、事志と背き人を敎へて自ら敎ゆる能はざるもの今猶然り、慙愧何ぞ堪へん、然れども世出藍の士に乏しからず、立志の礎發刊已來志を立て身を起し世道人心の爲め識德修養の途に上りたる青年所在極めて多しと聞く、瓦器の神用に供せられたるを歡ぶの情切ならざるを得ず、今や爰に修養錄を著す、收むるところ修養論、安心の地、處世の道、人生の行誘、智術、讀書、進步的人物等亦た凡そ十有七八題、前著は主として志氣源頭を說き、後著は進んで治己治人の活道を說んとす、所論素より取るに足らざるへきも、當今腐腸俗心の世、曇天の一碧たらば幸也（右修養錄の大意）

米國博士グリイン先生序文
福音叢誌主幹 八濱督郞君編

比較宗教一班

迷信の日本

定價廿五錢
郵稅四錢

全編振假名付珍袖美本紙數三百頁

迷信の日本は豫て迷信研究を以て有名なる著者が比較宗教專攻學士岸本、姉崎兩氏の協贊を得て本邦各地の迷信、禁厭、占卜、俗傳等に關する積年の研究を一冊に蒐集せられし者なれば觀察詳細、材料富贍實に振古の奇書珍籍と謂ふべし、故に研究の爲に讀むも可、娛樂の爲に讀むも亦頗る妙ならん乎。

發兌元 東京京橋區釆女町 警醒社書店

女學雜誌
第五百號
明治三十二年十一月廿五日發兌

社説

學校系統問題

◉學校系統問題を何んと思ふ乎、と云ふ質問をせられた人があつた。吾輩の意見では、何んとも思はなかつたのである。矢張り一時の流行で、當座の人氣問題に過ぬものと看て居た。どちらに爲つても構はぬ。決して注意すべき程の價値は無いものと見棄てゝ居た。

◉然し、機會であるから、一言するが、コンナ問題に熱注するのは賞めべきヿでない。よし熱注するは當座の座興としても構はぬが、此等を一大事の樣に思ふて、他に關心すべき大問題のあるヿを忘れるのが、太はだ宜しくないと、申し度のである。

◉第一、系統と云ふ、其の系統に重きを措くが抑そもの間違ひである。何故、系統に重きを措く乎。之に特別の認可、特別の保護利益等を與へて、他に異なりたる正統本系の樣に取扱かはんとする思想から起つたのである。實力を養ふヿより資格を造るヿに重きを措き、廣く自由に入學者を撰ぶヿよりも、認可したる下級より筍的に成長したものを偏重する時は、自づから系統問題に熱心になる筈である。濶大にして雄抜なる人才を養はんとせず、器械的に人を造り、國民の心を一途一徹に陶造せんとするやうな狹い量見を立てる時、自づから系統問題を注意する樣になる筈である。人心老衰すれば、系圖を八釜しく言ふ。登庸の路、滯ふれば、官歷年功を第一の條件とする。信仰衰ふれば、正統不正統の神學論に喧しましくなる。實力を言はずして系統を言ひ、自由を忘れて系統に注目する樣になる時は、既に老衰の半ばである。

◉今の系統論者の慷慨する所によれば、小學、中學、高等學

校、大學などと云ふ順々の階段が太はだ不調和で、互ひに一貫せる系統を立てゝ居らぬ。又、系統の立つた所では、寧ろ長が過る。夫故三十歳にも近づかねば、大學の卒業が出來ぬ程である。左れば寧ろ、今の高等學校を大學として、其の卒業者を直ちに學士とした方が然る可きであるなどと論ずるのである。

◉其の誤まりの、輕薄より發するとが直ちに分るではない乎。高等學校を、大學と云ふ名に變へて、其の卒業生を學士とすると云ふ丈が、何の違ひである乎。實力が少なくなつて、學士と云ふ同じ名目の價格が、前よりも落る丈のとで、喩えば新たに金貨を造つたやうなものである。舊金貨の半分しかない新らしい金貨が、矢張り一圓と呼ばれるのならば、舊金貨の一圓は相場に於て二圓になるので、即はち其の實際の待遇に元に變つたよはないではない乎。之が、系統論者の大改革案である。

◉天下の學問するものが皆な大學を卒業するのではない。中學でさへ、必らずしも卒業するのではない。然るに、其の最後の卒業を目的として、前の諸學校を悉とく系統的の準備に

充つると云ふ筈はない。小學は小學、中學は中學、皆な夫々獨立して差支へないとである。其の上へ〳〵と昇つて行く時に無益な空費を生ずるとがあると云ふは、必竟、入學を規械的にするからである。實力を以て入學を約すれば、決して差支へはないのである。(實力とは、眞との實力である。入校後の學問に差支へない丈に實力を試驗するが宜しいと云ふのである。今の入校試驗はむしろ、其の準備校の諸學科を習つたか習はぬかを吟味するやうなもので、入校の後の修學に必要なる實力の試驗ではない)。

◉一躰、小學や中學を卒業したとの經驗もないものでも、直ちに高等學校もしくは大學に入るやうにせねばならぬ。植木屋が植木を仕立てる樣に枝ぶりを美くそろわせるよりも、樹林家が棟梁の木を造るやうな風に敎育せねばならぬ。創業國たる新日本に於て人才を養ふには、常に此の心掛が必要である。久しく實地に働らいた三四十の壯年が、フイと大學に入つて數年潛心に勉强して見ると云ふやうな氣風にならせたいもので、夫等には、系統問題を八釜しく言ふドコロではない、丸るでソンナとを言はぬやうにしたいのである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◉又、大國と小國と、學風の指導に相違のあることを心得ねば成らぬことがある。大國に於ては、氣候、山川、歷史、言語等の相違からして、自づと國民の氣風を色々に感化して、自然に雜色をつくるが、小國に於ては、國民が自然に一つ色になりたがるものである。其の實例は、封建時代の大藩と小藩とを較べて見ると直ちに分る。大藩には色々の人物が居り、氣風も自づと茫漠として居たが、小藩の人は一藩悉とく一色で、如何にもキチンときまり切つて居たものである。日本などは、矢張り小國であるから、兎角、人氣が一ムキになりたがる。國中を擧げて、唯一種の流行、唯一種の輿論になることが屢ばある。之は、決して得意とすべきことではない。夫故、學問の種類、學風の特色等は、可成く、多數多色ならしめて、隨がつて、國民の氣風、好尙などを複雜、多岐、多調子に爲たいものである。夫には、系統を幾流れにもして、決して一道一色の系統などを立てゝはならぬ。之は、小國を大國となし、其の小人數を大人數にする爲政の秘訣で、國士たるもの丶一見識とすべき所である。夫にワザ〱系統を八釜しくして、小い國をいよ〱小さくし、固まり過る人氣をいよ〱固め、一克、單調子に流れ易き人心をいよ〱頑結させるは愚なことである。之は必竟、外國のマチに相違ない。

◉外國では、語元も同じく、歷史と混雜し、國境も相接し、又領土も廣く新らしく、兎角、人氣が散漫して、一國民たる國自慢の氣性と特色とが染まり惡い所ろから、學校の系統問題を八釜しく云ふこともある。獨逸などは、殊に夫れだ。日本で、ソンナ國の眞似をして馬鹿になつては困る。

◉又、政治家に一策を献ずるが、今の政治家は、兎角、人氣を一つにしたがるが、之は甚はだ宜しくないことである。人氣と云ふものは、可成く、多種多色で、あまり一つの事に許り狂熱せぬやうにして置くのが、國の利益であるのみならず、第一、治め易いのである。然るに、政治家が、學政を利導して、一種一定の學風を造らせ、夫によつて暫時民心を轉ずることなどがある。伊藤侯なども、此の策に倚つた人である。成程、一時は之によつて助かるが、他日大妨害を受けるのも、亦た之によるので、即はち、伊藤侯も、現に多少妨害を受けて居り、此の後はいよ〱大妨害を受けるであらふ。氣の毒な話しである。閣上に立て、大局を治定するものは、國民の

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

自治を促がし、其の自治を治むるので、自分で小さく特種偏黨を起してはならぬ。不偏不黨もしくは超然内閣とは、即はち此の事である。夫には、國民の多種多色を自由に發動せしめ、反つて其の多種多色をして互ひに制し、互ひに控えしめてこそ、治め易いのであるものを、ワザ／＼自分で學風を一定し、あとで其の一定した一色の爲めに苦しむと云ふが、古今の政治家にある毎度の過ちである。系統の事を八釜しく言ふ人は、此邊の事を何と思つて居られるのである乎。

◉然し、今の如く系統の正しからぬは、賞めた話しでもない。之は、不規律、不制裁から出たので、大自由から出たのではない。夫故、今更めて、系統を論じ、其のワタリをつける爲に、各種、各學、相ひ協議するなどは、穩當のヿであるが、文部に於て一種の系統を理想的に畫一し、之を正統と見とめて特別に待遇するなど〻云ふ思案は、根抵から間違つて居る。文部などは、ソンナ愚にして且つ狹いヿに力を盡さぬのが善い、益もないヿである。然るに、今の文部をして之に盡力せしめんとし、之に盡力せぬと言つて文部を攻撃するものもあると云ふ、何ど云ふ譯の分らぬヿか。民間教育者の無氣力も亦た甚だしいではない乎。教育に政府の力を頼んで何を仕様とする。一家の親仁が、隣の親仁の威嚴を笠に着て、我家の子を制裁せんとするやうなもので。教育とは、人が人を教ゆる神秘精靈の契機によるヿを毫しも思はぬのである。今の教育の振はぬのは、文部が悪いのでは無い。教育者が悪るいのである。

◉如何にも、師道は衰ろへたもので、教師に「我得たる者を汝に與ふ」と云ふ自信が無いのである。此の「我得たる者」は、我に於て得るより外にない、政府からも、義捐者からも、誰からも得る道が無い。然るに、此の自得したるものもなくて、人の子に教へるは、何を教へる乎。曰く、たゞ藝の外にあるまい。左すれば、藝人が藝を教ゆる丈で、一種の實業指南である。教化、教育などとは言へぬ。此等根本の問題に心配もせずして、たゞ系統問題に八釜しく言ふは、喩えば、年期奉公の長短を爭そつて、出店から本店に移る工合を切りに研究すると同じヿである。

小手の上に降りし世知らで厚衾、

かされて夜半のあられをぞきく。

講義

黒死(ペスト)病談

布川靜淵

左の一篇は高田醫學士の所著「黒死病論」を初め、私立衛生會の報告其他數多の新誌上の材料により一場の談話をなせる要領なり、詳細は專門の醫師に質すを可とす、玆には一通りの事を記しおくに止む。

○ペスト病とは何ぞや

ペスト病とは特種の急性傳染病にして淺部並に深部の淋巴腺に急性腫脹を發起する所の者を云ふ、詳言すればペストバチルヽスと稱する細菌が健康なる人躰内に侵入して發する疾病なり。支部にては瘟疫、癧子、痒子等の異名あり、黒死病(デル、シワルツエトード)なる名は第十四世紀に流行せし際名けられたるにて、ペストは羅甸語のペスチスより來れるなり。

○ペスト流行の歴史

ペストの起原は遠く紀元前にあり、基督降世紀元二世紀末乃至三世紀始め頃、已にリビヤ、エヂプト、シリヤ地方に流行せしとあり、歐洲には第六世紀後始めて流行したるが如し、則ち紀元五百四十二年、下埃及より流行し始め當時の全世界は此慘毒を蒙り、死算數なし、以後歐洲には屢々流行せしが其跡暫らく絶え、第十四世紀に至りて、實に空前絶後の大流行を來せり、黒死病の名此に始まる、當時は獨逸のみにて百廿五万の死亡あり、全歐洲にて實に二千五百万餘人あり、之を住民に比すれば正に四分の一の死者を出せるなり、歐洲の諸島は僅かにイスランドを除くの外、何れの地と雖も其慘毒に罹らざるはなかりき、則ち紀元一千三百四十六年より八十三年に至るまで繼續し、其死亡の割合を見れば

千三百四十八年	三分の二　死亡
千三百六十一年	二分の一　死亡
最後	十分の一　死亡

にして、漸次減少したり。十五世紀には營獨英の三國に流行し、十六世紀には諸國に渡りて傳播し、十七世紀には英、獨、西、瑞其他に流行せしも遮斷法を施したる爲め右數國にて跡を絶てり、十八世紀には土耳古地方に流行し歐洲にては僅かに營西亞の一部、佛國の地中海々岸に流行せるのみ。今十九世紀に至りては歐洲には稀有となり、バルカン、マルタ、伊太利のノヤ港、及西班牙等に流行を見たり、何れも船舶の病毒を輸入せしに原因したり、亞細亞にてはシリヤ、アルメニヤ、メソポダミヤ、及びペルシヤに流行し、又アラビヤの該地方と、印度にてはヒンドスタン、支那は雲南の山間に流行せり、是等は今世紀前半期の流行なり、後半の近年に至りては、亞剌比亞には三回流行し、トリポリには五百三十三人之に罹りて二百八人死し、ペルシヤにては千八百六十七年に二千五百人之が爲めに死し、メソポダミヤには三回流行して

千八百六十六年	三百人　死亡
千八百七十三年	四千人　死亡
千八百七十六年	二万餘人死亡

あり、營西亞の東南にては六百人死亡したるあり。支那廣州北海には千八百八十四年に五百人の死亡せる者ありたり、然り而して我日本人の間に多少ペストなる疫病の恐るべきとを知らしめしは、去る明治廿七年五月、香港に於て五百餘人ペスト病の爲めに死亡せる際、北里、青山の二博士と高田學士其他の視察探究に赴かれし時なるべし、爾來邦人の間にはペストの聲を聞くとなかりしが、過日神戸葺合村に於ける患者の死亡せしより全國の騷擾を來せる次第なり。今年の流行地は歐洲にては西班牙、葡萄牙の二國、他は亞細亞にして支那の厦門、牛莊、及び香港の三地方なり、本年初發以來十月十日に至る總統計によれば香港には千四百六十八人の患者中千四〇九人死亡し、印度孟買は同十八日まで、廿四万七千人の患者中、千九百万六千餘人の死亡あり、本邦に傳播せるは則ち右の地方より船舶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にて輸入せるにて、其性質や頗る激症なれば極めて恐るべきものあるなり。以上を大觀すれば、

第六世紀　下埃及より歐洲に蔓延し
第十四世紀　歐洲全部に蔓延し
第十九世紀　亞細亞に大流行し

たるにて、今年は支那、印度より遂に我國に新輸入を來せり。

○ペストの原因論

ペストの病性に就ては種々の説あり、一説には觸接傳染病に非ずとの事なり、則ち患者に觸接するも傳染の虞なしとの説なり、寧ろ患者を包圍せる空氣が病毒傳染の媒介なるにて所謂瘴氣觸接傳染病なりとなり。又空氣の外、患者の使用せる附屬品則ち衣類其他患者に觸接せる物品より傳染すとの事なり、此二者は何人も疑はざる所といつて可なるが如し。私立衛生會の注意書に云く、

ペスト病はペストバチルヽスと稱する細菌の傳染によりて發する病なり

ペストバチルヽスは血液に混じて全身中到る所に存在するものなり

次て其性質を知るべし。

●土地と氣候——ペストと土地及び氣候に就て白耳義の醫カピノ氏云へるあり、『氣候の差異も南方も北の方なる清き氣も熱き氣候も寒なるも病魔を防ぐ力なし、彼は山中又谷底の嫌なく内地に進み島に飛ぶ、平原も丘陵も森も沼も湖も其蔓延を妨けず彼は洋の波上に人に尾し邑にも屯にも市にも入る、冬の嚴寒を待つは愚かなり、ペストは春の溫暖を妨げす、鎔金の暑熱も月の盈缺も星宿も濕氣ある南風も粗鋭なる北風も意とする所に非ざる也』と、炎熱の地方にては亞刺比亞に流行せり、嚴寒の地にてはグリンランドに流行せり、今の牛莊と孟買を見るも亦其一斑を知るに足る、

●四季——歐洲に於ける八十八回の流行時を四季別すれば、

發起の時	春	二十二	夏	二十六
	秋	二十三	冬	十七
極盛の時	春	十三	夏	四十八
	秋	二十六	冬	八

冬に於て稍少なく、夏に於て多きを見るも、こは夏の季候の冬よりも一般に黴菌を增殖せしむる事情あるか爲めなり、而かも冬なりとて安心すべきものに非ること は、右の表によりて明かなり。唯僅かに少なきを見るのみ。

●住居——千八百十三年希臘のマルタ島のヲレッタに流行したる時の統計によれば左の如し、

發病戸數の總計		五百六十五戸
患者の總數		一千百三十一人
發病住居の區別	土間に住居するもの	二百五十二戸
	床下室に住居するもの	四十四戸
	室少き室に住居するもの	百四十一戸
	普通家屋に住居するもの	百二十七戸
空氣流通の狀況	住居するもの	百七戸
	稍々良なるもの	百七十戸
	不良なるもの	二百八十七戸
發病住居住民の生活上の區別	富みたるもの	八十七戸
	中等の生活をなすもの	九十七戸
	貧民	三百八十三戸

其土間に住居するもの、空氣流通の不良なるもの、及び貧民に多きや知るべきなり。

●職業——明治二十九年臺北に於ける調査以下を見れば、勞働者に多きこと明かなり。則ち左の如し。

山極博士の報告

大工	十一名	裁縫職	三名
勞力者	九名	商	九名
齒科醫	一名	下宿屋	一名
消毒人夫	二名	避病院炊事掛	一名
活版職	二名	左官	一名
官吏	七名	大弓屋	一名

藝妓 一名　箱屋 一名
不詳 七名

第一避病院の報告(在臺北)

ペスト患者に直接する職業	巡査	一	一名
塵埃多き氣中に呼吸する職業	土木工夫	一	三名
	左官	一	
	疊屋	一	
銃器を取扱ふ職業	大工	七	十一名
	工	二	
	硝子工	一	
	苦人足	一	
飯食物商	菓子商	二	四名
	砂糖商	一	
	下宿屋	一	
各種の人に親接する職業	娼妓	一	三名
	藝妓	一	
	齒料醫	一	
各地を旅行する職業	郵便脚夫		三名
雜業	官吏	五	二十三名
	受負商	二	
	雜貨商	四	
	樟腦商	二	
	雜商	五	
	質屋	一	
	活版職工	一	
	無職	三	
不詳			七名

第二避病院の報告(在臺北)

大工	六名	土方人足	六名
受負人	一名	裁縫及洗濯業	二名
小使	二名	官吏	五名
雜業	十名		

又臺灣全島を通したる總督府の統計は左の如し

職業	地方 安平	臺南	臺北	計
官吏	|	|	一一	一一
商人	七	|	一九	二六
職工	|	|	二二	二二
勞働者	三三	|	一〇	四三
雜業者	一二	|	一八	三〇
被傭人	|	九	|	九
不詳	|	|	一七	一七
計	五二	九	九七	一五八

されば、住居不潔にして空氣の流通惡しく食物の不良又は不足なる皆な是れ此病を増長せしむるものたるや明かなり、先年香港にて千二百人のペスト患者ありしか、歐洲人は僅かに三名に過ぎさりし如き、一は衣食住の不潔にして他は清潔なりしに依らずんばあらず。又た個人的に於ては、過勞、過去の病、衰弱を惹起す勞作の如き、何れも之を催進し感冒、食物不攝生、傳染恐怖の情等も誘因たるなり。

○ペストは獰猛の病毒なり

ペストの如く獰猛なる病は未だ世にあらざるが如し、其死亡數の多大なるを以ても知るべし。十四世紀には歐洲にて二千五百万人を倒盡し去り、今年は孟買にて二十万人を死亡せしめたり、其他は歷史に記したるが如し、更に一二を記すれば千七百八十八年八月ツーロン市にては二万六千人の住民中、一万六千人死去し、此病に罹らざる者は僅かに六千人のみなりしといふ。倫敦市にても人口の過半を失ひしとあり、プロフゴンセにては廿万人、マルセーユにては四万人、モスコにては全市住民の過半を倒盡したる如き、一家、一村は云ふも更らなり、住民の過半數を失したるを屢々なり、今年流行せる所にて死生の割合を聞くに、百中

	死亡	生存		死亡	
孟買	九〇	一〇	香港	八五	一五
臺灣	七五	二五	牛莊	八五	一五

なり、神戸に於ける狀態を見るも、今回のペストの劇症なるを知るに足る、豈に寒心に堪へざるとならずや。

○ペスト豫防法

ペスト豫防には、交通遮斷、撿疫、公衆衞生、及個人衞生の別あり、交通遮斷さ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

撿疫とは、其筋に於て行ふ所にして吾人の注意すべきは公衆衛生と個人衛生の二者なり、之に就ては、私立衛生會の豫防注意書最も盡せるが如し。左に之を抄すべし。

(一)病者なき前の注意

一、ペスト病ある家並に近邊に近くべからず

一、ペスト病毒は不潔にして暗黒なる場所には久時生存するものなるが故に家の内外並に人體衣服を清潔に爲し彼の棲住に適せざる樣心掛くべし殊に蚊、蠅、虱、蚤等の退治を爲すを要す

一、ペストバチルレスは日光に觸れ又乾燥するときは容易に死滅するものなるが故に家内に日光を導き且つ可及的障子又は窓を開きて空氣を流通せしめ又衣類家具等は時々日光に曝露すべし

一、飲食物は必ず煮沸すべし

一、鼠ペスト病の恐るべき傳染物なるを以て流行に先だち之れを驅除すべし又斃鼠ありたるときは其ペストに斃れたるや否やの検査を乞ひ大に警戒を加ふべし何んとなれば人間のペスト病發生せざるに先んじ鼠のペスト病流行することあるべければなり

一、皮膚の創傷ある人は相應の醫療を加へ又胼胝、病の類はワセリン或はコロヂウムを塗り封ずべし又跣足にて徒歩すべからず

一、若し惡寒發熱寒冒の如き容體あり又は熱なくも鼠蹊腋窩頸頭の淋巴腺を採りて腫れ痛み等あれば迅速に醫療を加ふべしペスト病は恐るべきものなりと雖も早く治療を施せば治癒し易ければなり

一、ペスト病流行地より來る襤褸、古綿、紙屑、古着、古革、古毛布類は勿論一般の貨物等にも往々病毒の附着せることあるを以て出所の明かならざるか又は消毒せざる是等の物品は取扱ふべからず

(二)病者を發生したるときの豫防法

(甲)傳染病院若くは隔離病舍に入院すべし前にも述べたる如く一朝ペスト病に罹り長く就床するときは種種の原因に依りて其一家内は何もかも病毒にて汚さるる憂あるが故に其家族は虎列剌病赤痢病に對する位の尋常の注意にては到底傳染を防ぐこと難く縱し其當時に於て傳染を免れたりとするも其後に至り何時發病するやも計られず終には其家屋を燒拂はざるべからざる不幸にも遭遇せん依て醫師の診斷上ペスト病と定まりたれば迅速に病院に入院すべし然るときは自己の利益なるのみならず家族並に公衆一般に對する德義をも盡すべし

(乙)一家族にペスト病者を出すときは病者を勸めて入院治療を受けしむべし然れども萬々已むを得ざる事情ありて自宅療養を爲さゞるべからざる場合には一家内は全部病毒に汚れたるものと認め左に記する箇條を嚴守し一刻も油斷あるべからず

一、手足並に其他の皮膚を探索して微かにても表皮の損じたる箇所あればコロヂウム又はワセリンの類を塗り或は手袋を用ゐ且つ一日數回二十倍石炭酸水にて洗ひ又常に足袋を穿つべし殊に看護するもの並に汚物を取扱ふものに於て然りとす

一、飲食水使用水一般の飲食物並に其器具は煮沸して直ちに用ゆべし

一、飲食物及其器物等は蠅帳の類を以て蠅類の襲來を防ぐべし

一、患者は蚊帳中にて養生せしめ蚊蠅を防ぐべし

一、家內の用ゆる衣類夜具の類は毎日々光に曝露すべし然るときは萬一病毒の付着することあるも之にて滅殺し得べし

一、勢めて家鼠を退治すべし然るに俄かに猫を飼ひ家鼠を脅迫するときは隣家に逃走するの恐あるべし寧ろ他の方法を用ゆるが穩當ならん若し斃鼠を發見せば火箸等にて挿み之れを燒却し其斃鼠のありたる場所は石炭酸水等にて消毒すべし

一、衣類及身體は日々洗ひ清潔に保ちて病毒の付着するあるも生育せしめず又虱蚤等の繁殖を防ぐべし又可及的是等の昆蟲を捕獲して火中に投ずべし

一、看護するものは病者及其夜具其他一般の病者用器具に手を觸れたるとき直ちに二十倍石炭酸水中に手を浸して叮嚀に洗ふべし

一、病者の肌に觸るゝ衣類は日々煮沸して取換へ又夜具は病者に直接せざる樣白布にて上覆を製し日々煮沸して取換ゆるを良とす

一、病者の膿汁、糞便、吐物、尿、咯痰、唾液、鼻液、帶下、血液等苟くも病

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

者より排泄せるもの並に之れに汚れたるものは悉く消毒せざるべからず病者の皮膚を拭ふときは其布片を直ちに二十倍石炭酸水中に自己の手と共に浸して洗滌消毒すべし

一、病室並に他の屋室は塵埃の滞ふらざる樣清潔に爲すべし但し普通行ふ如く塵拂箒を用ゆることなく煮沸水殊に良好なるは石炭酸水をひたしたる雜巾を以て拭ふべし

又鼠の尿並に糞塊には夥だしくペストベチルレスを含むを以て石炭酸水を霑ほしたる布片にて拭ひ取り共に燒却するか若くは消毒藥中に投入るべし

一、病者に用ゆる總ての物品は病者專用と爲して區別し置き決して健康者に使用すべからず又飲食器は毎用後病室に於て煮沸消毒すべし殊に二十倍炭酸曹達水にて煮沸すれば確實なり

一、其他屍體の消毒家屋器具等の消毒實行の方法は其筋の注意に服從して嚴守すること緊要なり

其他、内務省、警視廳等より注意せるもの尠なからずと雖も、目下流行地たる兵庫縣知事の發せるものは、前者と多少重複するものあれど、併せ記して參考に供す。

「身體に就て」殊に手足其他の創傷はペスト病毒の入口なれば以下各項に依り注意すべし●創傷面は二十倍の石炭酸水又は千倍の昇汞水を以て洗滌し尚ほ右の藥劑に浸せるガーゼ若くは晒布にて包むべし決してタモトクヅ(袖底の堆塵)ミツプシ古布片古紙等を用ふべからず●指先のサカムケを生ぜざる樣にし若し生じたるときは應急の手當として胖創膏又は即功紙等にて覆ふべし●腫物は手療治をなすべからず●楊枝等にて齒齦を損ぜざる樣注意すべし●髮は石鹸にて洗ふべし●手足の爪は切去りて常に垢の溜らぬ樣注意すべし●齲齒は療治を受くべし●常に足袋を用ひて創傷を防ぐべし●殊に勞働者は履物に注意すべし●足袋股引襦袢の類は怠らず洗濯すべし●身體に異狀を覺えたるときは速かに醫治を受くべし●ペスト病は期を過たず相當醫治を受くるときは治癒するもの多し強ちに不治の病と信ずべからず●清國及び臺灣地方より來航せる船内に入り又は其荷物等に接せるものは少くも手足及び衣服を消毒すべし

「衣服に就て」衣服夜具の類は品質の良否に拘はらず清淨なるものを用ひ又時々日光に曝らすべし●古着類は假令清淨なりと認め得べしと雖も其儘用ふべからず●貸湯園には注意すべし●衣類の貸借はせざるを可とす

「飲食物に就て」飲食物は總て熟煑したるものを用ふべし●水は河泉井水の別なく必ず煑沸して用ふべし●目下神戸市に供給せる水は濾過を經ざるを以て降雨の時杯には溷濁することありと雖も素質は善良なり●牛乳は飲用するに當りて一時間以上湯煎に上ぼすべし●飲食物を入るゝ所には鼠は勿論其他の動物の入らざる樣注意すべし

「住居に就て」屋内は毎朝怠りなく戸を開き又暗き所程叮嚀に掃除すべし●敷物の類は時々日光に曝らすべし其濕拭することを得るものは拭ひて後日光に曝らすべし●糞尿壺及び宅地周りの肥料壺は滿盛せぬ中に汲み取るべし●糞尿壺等は破損の箇所なき樣注意すべし●家周りの濕氣ある所は勾配を附け溝を設け塵芥等の散亂せざる樣注意すべし但滞の勾配を變せざる樣にすべし●芥溜の芥は時々掃除すべし●下水溝渠には緻水泥土塵芥等を溜むべからず●井及び井流し等に破損の箇所を生ぜざる樣注意すべし●履物は適當なる方法にて消毒すべし

◎結　言

右は高田學士の所著を基として最近の材料を加へてペストの一斑を記したるもの、素より不充分なるも、昨今の新聞紙は怠らず這般の消息を傳へつゝあれば、新規にして善良なる豫防法、治療法等を見出すに至るべし、余輩は之れに關する消息を怠らず讀まれんことを希望するものなり。ペストの恐るべきは以上の記述によりて其一斑を推知し得べしと雖も、此疾病たるコレラ、赤痢の如きに比して數十倍の猛惡なる害毒を有し、社會上、經濟上、財政上、文化上に及ほす影響の至大なる殆んど計るべからさるものあるを悟らさるべからず。吾人は此際に於ても日本家屋改良の必要を叫び、木の葉の如き家屋の廢せられんことを望むものなり。

評論

幽靈の電氣學的說明

（ポーテンシャルの差は　幽靈を呼び起すものなり）

青柳有美

必ずしも唯心と云はず、必ずしも唯物と觀ずることとなしとも、宇宙に數あまたなる法則あるべしとは、我が得て信ずる能はざるところなり。蘇國の故敎授ドラモンド氏は、心物兩界ともに別法ありて、しかも其源を神に出すと說きしが、我れを以て觀れば、宇宙の間、たゞ一元一法あるのみ、何ぞ二法一元といはんや。されば、全宇宙は唯一善神のしろしめす唯一の天則によりて運轉進化するものにして、物質の法則は即ち以て心靈の法則たり、心靈の法則は即ち以て物質の法則たるべし。是に於てか、人情治政の秘案は、之を物理生理化學の理法に應適すべく、百般科學の原則は、又之を心情諸象の解明に利すべきなり。現今の化學と物理學とは、素より其發達幼稚にして、悉く靈界微妙の諸現象を說明するに難かるべしと雖ども、之を以て心靈の法則と何の關はるところなしとする如きは、蓋し痴者のことなり。是に至りて思へば、かの古今の問題にして、不可思議中の不可思議なる幽靈の現象の如き、必ずしも電氣學の法則によりて、解明し得られざるの理あらんや。我れはたゞ僅に學べるところにより聊か衆に先んじて之を試み、敎を識者に待んか。淺學短才、知るところ狹く、論理に誤り多かるべきは、素より其の處なり。

* * * * *

高きにある水は、流れて低きにつかざるべからず。高温度の物質は、必ず先づ其熱を低温度のものに傳ふ。此の如く、高きポーテンシャル（潛力）ある電氣は、また移りて低きポーテンシャルあるところに至り、玆に電流の現象を生ずるものなり。故に電氣學によれば、電流とはポーテンシャルの差より起るものにして、ポーテンシャルの差の起る所因は、異質の二物相接するに基するなり。かく、二種の異物相接する時は、必ず其間にポーテンシャルの差の生ずべきを、ヴォルタの定

則といふ。このヴォルタの定則は、また之れを情感界の諸象に適應すべく、今茲に二人の人ありて相接せば、必ず其間にポーテンシャルの差の起るを觀る。蓋し、人心の互に相異るところは、猶ほ其面の千差萬別なる如くにして、二つの人心は、二種の異性物なればなり。而して、人心ポーテンシャルの差より生ずる電流は、世間の約定上、之を稱して情義といふ。されば、情義とは人心電氣の流れにして、なほ電流の種々なる器械的作用を營む如く、一種の電動力となりて、親切同情、盡力など、もろ／＼の發動をなすに至るべし。

情交ある人々の關係は、假令ば金屬線によりて連結せられたる炭板と亞鉛板との如し。電氣學によれば、二種の金屬片は之をたゞ金屬線のみによりて連結するも、其間自らポーテンシャルの平均起りて、電氣の、線中に循環流通するが如きことなく、まことに靜穩の狀態を呈すと雖ども、若し之を酸液の如き化學作用を及ぼすべきもの丶うちに浸せば、茲に始めて電流の現象を起すに至り、電氣は其線の間を流るべし。されば、相知れる友と友との間に、情義の現象相生ずるも、又此くの如く、通常事なきの日には、別に情義の見るべきものなしと雖ども、一朝化學作用を蒙りて、其一方が疾病痛恨不幸等の悲歎に沈むときは、茲に兩者人心の間に激烈なるポーテンシャルの差を來たし、情義の電流は流る丶なり。故に、周圍の異變は、心靈電氣學に於ける化學作用を及ぼすべき酸液なり。而して、電流の方向は、既に稍〻述べたる如く、ポーテンシャルの高き所より、その低き所に向ふものにして、總て化學作用の強き金屬板は、高きポーテンシャルの電氣を生じ、其化合力弱きものは、低きポーテンシャルの電氣を起すものなり。今甲乙二人の友人あり、互に相距ること遠く、しかも、甲は疾病に冒され、乙は之れに冒さる丶ことなかりしとせば、是れ猶ほ亞鉛板と炭板とを酸液内に浸して、化合作用の、獨り盛んに亞鉛板にのみ營まれたるが如し。即ち病人は是れ亞鉛板にして健康者は是れ炭板たり、疾病は是れ酸液たるなり。而して、兩者の距離は之れを一大電池なりと觀るも、妨げなからむ。甲の病者は激烈なる化學作用を受けたるものなれば、茲にポーテンシャルの度を高むること頗る甚しく、その精神は自然に低きポーテンシャルを有する乙の健康者の心に向つて流る丶なり。これ猶ほ亞鉛に起れる電氣が、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

酸液を經て炭板に流るゝが如し。かくの如くにして起れる電流を、いま導躰のうちに流れしむるに、そのポーテンシャルの差、著しくして、電動力强大なれば、或は熱を起し或は磁針にフレを生ぜしめ、或はその通過せる液躰の合成分を分解するを見る。然らば、人心の場合に於ても、或る化學作用によりてポーテンシャルの高まりし精神の、いかなる低きポーテンシャルの心に流れ、玆に不可思議なる夢幻幽靈等の諸現象を呈するに至るや、敢て怪むに足らず。以上は疾病に罹れる時の一例なれども、もし甲乙二人者のあるありて、もし甲なるもの乙に向つて非常の怨恨を懷かば、甲の心のポーテンシャルまた高まりて、乙とポーテンシャルの差を生じ、乙は甲の幽靈を視るべきなり。故に、幽靈とは或る何物かの刺激によりて、心のポーテンシャル高まり、その低きポーテンシャルある關係者に向て流れたる電流の仕事なりといふを得べし。

然れども、難ずるものあり或は問はん。電氣學の電流には、之れを導くの導躰あれども、相距れる人と人との間には、人心電氣を流れしむべき中間物なし。然らば高きポーテンシャルの電氣は、如何にして低きポーテンシャルのところに移りて幽靈の現象を呈するか。また如何にして甲の電氣は必ず乙に到り、他の人に移りて幽靈の戸或ひを生ずる如きことなきかと。之を說明せんと欲せば、暫くかの電信に就て考ふるをよしとす。近來の發明に無線電信なるものあり、これ傳播電流を利用して、通信を謀るの術なり。かくの如く既に線なくして電氣通信の開かるべきものならば、二人の間別に之をつなぐの中間物なくとも、ポーテンシャルの差によりて、玆に人心電氣流れ、幽靈を出すに至ること、何ぞ敢て怪むに足らんや。然らば幽靈の戸或ひなきは如何。今もし乙電信局なる電池の消極線の末端に銅板を付し之を地中に埋め、その積極線は、遠く之を天外萬里の甲局に延長し、而して、其末端に同じく銅板を付して地中に埋め、其電路を『閉鎖』(電流を流れしむることなり)せば、電氣は甲局地中の銅板より、この廣き大地を通りて些かの戸或なく、巧に乙局地中の銅板に循流するなり。地球は廣く電信局は多し、其地中に埋沒せらるゝ銅板の數素より限なかるべしと雖ども、電流は常に己が流るゝ輪道を離るゝことなくして、たゞ我か輪道內の銅板

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

のみに到り、決して他を顧みざるなり。これ幽靈が多くの人にゆかず、たゞ特別の關係ある人々の間にのみ見らるゝ所因にして、何の情交なく輪道以外にある人の、しかも其視し人と相並んで、猶ほ視ること能はざるの理なり。世人は、幽靈なるものゝ、三千里外の友に、忽然として現はるゝに驚けども、幽靈を以て、人心ポーテンシャルの差によりて生ずる電氣の仕事なりと觀ずれば何の驚くべきことだになし。其戸惑ひせぬも電氣學の法則なり、その瞬間にして三千里外に飛ぶも又法則なり。要はたゞポーテンシャルの差と、しかも其差なる電動力の强からんことにあるのみ。

* * * * *

書き終りて是處に至れば、我れながら意外に興味少なく、綴る所冗長にして、格別の新發見ならざるに驚く。されど、些か考慮の末になるもの、もし學者研究の暗示とだになるを得ば、無上の光榮なれ。

大磯だより

中島湘煙女史談話

青柳生記

『湘煙女史岸田俊子』といへば、一時は天下を振動した女丈夫で、今でも誰れが心にも忘れられない故中島信行男爵の未亡人だ。その昔、多くの志士に血の涙流さしめし斯の女英雄も、肺患といふ恐ろしき病には敵し難く、一たびは故長城居士と共に、羅馬府はコルシヤムの邊りに、古き名都の跡吊ふたこともあつたが、今は大磯王城山下の草廬に、靜に韻事を樂しみつゝ、その重なる病を養つて居らるゝのだ。女史がまだ横濱に居らるゝ頃、さる人の使人となつて一度訪ふたこともあつたが、けふは特別の敎を受けんものと、熱海旅行の歸り途に態々自ら好んで訪問した。玄關には『喫煙の御客御斷り申候』と、女史自筆の張札がある。これは、煙草の煙が咳に障るからなので、暫くして書室に導かれた。

* * * * *

●毎度御文は雜誌で拜見して居ります。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●その扇は？一寸お見せ。仲々よく書いてある。私も書は好きだ。この頃は大分あの『佳人七ッ道具』で、世間から悪るく云はれてる様だナ。『日本』新聞を御覧か……悪口を云ッてたよ、先達ッて、横濱から○○が來て『青柳さんはドゥも嫌いだ』ッて、大變怒ッてたから、……『青柳さんなら一度私も遇ッたことがあるが、そんな人の様でもなかッた…此頃は顔に似合ばん…大分づるくなッたと見える』と、云ふて置いたッけ。

●學校で何を教えて居る？……ソウか。森さんの審美綱領は、どうだナー？、今日送る様に頼んで置いたが、兎角古いものを讀んで居ると、新しいもの丶方がお留守になるし、新しいもの丶方を見てばかり居ると、古るいもの丶方がお留守になるし…困るですナ。

●別に『專ら』讀んで居るといふものはないのサ。何んでもマア手當り次第に讀むんだがナー…。近頃は孫子の兵法に、六韜三略…唐本の三國志なんか見て居る。仲々面白いてナ。長男が來て『おッ母さん、そんなものを讀んで何する。戰争でもする氣か』といふから『ウム戰争をする…戰争する氣だ』ッて、此間も笑ッたのサ。

●今この居るところは、大磯でも釜口といッてナ、頼朝の富士の巻狩の時に、釜を据えた所でナ　その釜は箱根にあるそうだが、今以て、釜口だけはぢき其處に殘ッて居る。この釜口といふ名はドゥもあまり俗で面白くないからナ、長城の生きてる時分なぞにも、よく不平をいッて、叱られもしたが、此頃古い地圖を出して調べて見ると、この後の山は王城山といふことに書いてある。それからナ、土地のものを呼んで聞いたら、矢張りそうだといふことで、今度は善い名を得た…これで場所もよし、名もよし、名實共に適ふと大悦びで居る所だ。立ッて其處の障子を明けて御覧…その山が直ぐ見えるから。

●脚袢を穿いて來たナ。日本の身躰につけるもののうちで、草鞋はドゥも一番心持ちの良いものだ様だよ。なんだか氣がすッきりする。私も若い時分は隨分草鞋がけで歩くのが好きで……一度母と一緒に富士山に行ッたのサ。頂上まで登ッたら、急に恐ろしく曇ッて來て…神主は危險から、直ぐ下りれといふので下りたが、四町ほど來ると骸骨がある。追々と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

霧も深くなッて、少し前が見えなくなッたから、これは互に助け合ふ氣になると共倒れだから、私と母は先づ下山を目的として、途中に見えなくなッても尋ねぬことに確めた。そのうちに母は遂に見えなくなる、‥‥丸で夢中で麓について、漸く翌日氣がついて見たら、大宮の宿屋に寢かされてたことなどがあッたよ。

◉大磯は始めてか‥‥鴫立澤はステーションの所を左にズウッと行きさへすると直きだよ。其處には一人俳諧の宗匠が居る。垢の拔けた男かッていふのか‥‥何に‥‥垢もあるし、ごみも塵も灰も家の前には山の樣に積んである。私の見た所では、商賣に似合はんよい、、れる程垢のついてる人物だと思はれる。私しの所にも時々やッて來るがナ。

◉一躰、大磯は見るものゝない所だから‥‥マア人が來ると鴫立澤にでも行く‥‥しかし矢張り大磯第一の名物は伊藤侯だてナ。それからマア此處サ。仲々此處にも珍らしい人が來るてナ！、せんだッて、佐々木信綱さんが來て餘程話しゝて行ッたッけが‥‥宗演なども來るよ。あれは仲々面白い男だ。

◉宗演は非常な大膽もので‥‥一躰禪宗の寺といふものは、僧侶と有髪の僧ともいふべき居士と、つまり自分の弟子ばかりを寄せて修道して居たものだが‥‥あの宗演といふやつは前いふ通り非常の大膽ものだから、寺を皆な解放して誰でも來いといふことにしたのだ。今では大學校のものなぞも大分行くそうだ。始めのうちは大學校の連中は六ケしい理屈をいふので、大分困らされたそうだが、今では困らん秘訣を覺えてしまッてドシ〳〵例の喝棒で毆ぐッてやるそうだ。この秘訣でゆけば、どんな理屈をいふ奴でも毆ぐられるッてたよ。然しその『呼吸は秘密だから、仲々敎えられんて』たッけ。

一寸立ッて床の間の邊りに行かれたが、一冊の洋本を抱き來られた

◉これはナ、ベンザムのユーテ井リテ井ーといふ本だがナ‥陸奥の持ッてた本だ。陸奥といふ人は、福堂といふ號だッたが、これは獄中に七年居ッた間に、この本を讀んで譯し、英學の力も出來智識も得、精神上のためにもなッたから、實に幸福だといふので、自らつけた號で‥‥つまり此の本は自分の寶、家の什寶といッてもよいと云ので非常に大切にし

て、絶えず肌身につけて持ッて歩るいてたものだ。それで、十七年前に京都まで花見に來て、私が始めて遇ッた頃なぞも、現に懐にして居ッた程だ。それで陸奥は京都に來て新島さんに遇ッて、マァ非常に感服した譯なんだ。どうも新島さんの徳はえらいと、非常な感服の仕方だッた。それからマァ私にも始めて遇ッて、京都の人物は、新島襄と岸田俊子の二人だといふ大變な譯なんだ。『新島さんは成る程徳はえらいが話が面白くない。しかし、芳卿に遇ッて實に面白く愉快で悦ばしい』といふので、その愛して絶えず離さなかッた此の本を悦ばしさの餘り、紀念の印にだとて贈ッてくれた。その時、すぐ筆を取りて、こゝにある文は書きつけてくれたのだが、この通り漢文だ。しかし、別に草稿も何もなく、そのまゝ書き流したものだ。仲々うまく出來てる。矢張り才子だたからナー。こゝに挿さんである紙の詩は、この前に片付けた時、この本を見つけて、書いて置いたものだらふよ。もし、なんならあげるから、持ッて行ッてもよいよ。

曝書中得一書是爲陸奥福堂翁獄中所譯利學正宗原書翁愛惜殊甚雖觀花之游遠携來未曾一日離身邊自云吾賓無過之者十六年前春日初會于京洛之日割愛以贈吾且卷頭記所以其贈今吾對之何得無懷舊之涙乎

君始出獄日　吾恰辭宮邊　鶯花春三月
屈指十六年　一見眞舊識　歡話意濟然
眞葛櫻前酒　渡月橋下船　罵世如狂者
按詩似學禪　暗窓數年苦　激成利學篇
篇端記此會　授吾期交全　爾來共得病
屢無話舊緣　書存君不見　只濺涙百千

湘煙女史未定

◉伊藤侯は、あれで仲々多藝だから、端唄もやるしか、義太夫もやるしか、常盤津もやるしか、よしこのもやるしか、踊りもやるしか……素より女の話はするしか……なんでもやる……そうして、一々皆なそれに議論があるのだから、仲々話のある人で、面白いてナー。拙家なんかに遊びに來ても、半日位は直きに經過てしまふ。いくら話て居ても、退屈でないからナ。時々ヤッてくるが。

◉伊藤侯は今迄『是れは！』といふ様な、何もかも打ち込んで仕まへる程のゑらい女に遇ッたことがないのだらふ。マァ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女といふものを團扇ぐらいに思ッてるらしい。暑いから、先づそこらにある團扇を取ッて煽ぐ。そのうちに涼くなる。すると、其團扇はどッかに捨てゝ忘れてしまふ。また其うちに暑くなる。そうすると、今度は前の捨てた團扇は其儘にして、近所にある團扇を手當り次第に取ッて、又煽ぐといふ次第なんだらふ『そう夢中になれる程の女に遇ッたことはない』ッてたよ。凡て前のことは、それぎりなんだ。

◉愈々、こう死ぬと極ると、決して心持の悪るいものでないよ。却て、何んだが樂な樣な樂しい氣がして、重い荷物でも下ろす樣な心持になり……腹なんかも立たなくなるし、それに萬事世話でなく、便利なものでナー……着物を拵へよふといふても、どうせ死ぬんだから、拵へたとて着られヤすまいしと思ふと、まづ古いものでも裏返して、間に合はせる氣になる。凡て惜む心がなくなッてナー　是れまでは本なんか隨分人に貸すのが、厭やだッたが、トシ〳〵貸してやるしナ……金のことなんかでも、長男が來れば、用るだけ持ッてゆけ、うちには一期分もあればよい、足りなくなッたら、後はどうかするからと云ふ樣なもんだ。この冬はどうも危險よ、大抵もつまい……いけないだらふ。然し、こう何時も『今か〳〵』と思ッてるから、存外、長が持ちがするかも知れないと思ふのだ。この前見た時よりは、餘程變ッてるか。……貴卿の說だと、瘠せたものは賢しいんだといふが、私の瘠るのは病氣のせいだからナ。……どうだェ……死にそうに見えるかェ？

◉まァ何もないが、うちで出來た青物でもあげるから御飯をおあがりー。私は一躰花といふものを好きでナー。うちの庭には色々皆な花を植へて居ッたがナー……花といふものは、悲しい時には極いけんものでナー……其零落が直ぐ見えるから。然し野菜になると、零落する前に人が採ッてしまふから、哀れな悲しいところが見えないで善いのサ。それから皆な花をやめて畑にして、青物を植えらしたのサ。隨分廣いから、まァ年中買はんでもよいよ。大磯といふ所は夏になると二千人も外から人が入り込むから、非常に青物が不足する。それに今日の樣な天氣の時には、肴もなくッて却て東京から取り寄するんで　酷い所だ。

◉せんだッてお〇〇が横濵から來たから、私は彼女に引導を

渡してやッたのサ……断じて獨身で暮らす決心をしろと引導を渡したのサ。婚禮をし樣と思ッてると、絶えず心配で碌な男には嫁かれいなからナ……嫁に行くのだと思へば、白髮が一本生へても氣になるし、皺が一ッ寄ッても心配だし……そうなると善い人はつかまへられないものだ、飛んでもない男と一緒になるからナ。それより獨身と決心して居れば、一二年するうちに、却て、思ひがけない善い人に遇ふことがあるものだ。

◉貴卿はまだ生れてから悲しいといふことは知るまいナ。何に……悲し過ぎて困ッてる位だと。中江篤助といふは、知ッての通り佛蘭西學者で、隨分亂暴な男といふ譯になッてるが、彼人が非常な感情家でナ……或時私の所に來て『何故だか解らんが、毎晩涙が出で〳〵枕がヂックリと濕める位で、夜中泣き明かすことがあるが、信じられますか』といふから『信じられる所ではない、とうからそうだらうと思ッてた』といッたら『芳卿は能く我れを知るものだ。芳卿より外に我れを知るものはない。友達はいくらいふても皆な信じません』と、大變悦んだッたが、人は存外貌によらんもだナー。

◉貴卿も女の惡口では、攻撃をされてるが、私も實は女が大嫌サ。ドウも洒落な、かまわん所がないからナ……男なら何んな人でも大低手には餘まさんが……女とくると、丸で呼吸が別らんでナー……どふ向けて善いものやら……トンと困るテ。遇ふとつまらん外部ばかりの話をしてナ……ちッとも面白くないのだ。ドウも疲れるよ。一躰女といふものには、少しも禪氣がないからナ。女は皆な魔のさしてるものだよ。

◉女の學校には、宗教を看板にかけるのは、よッぽど考へものだテ。まづ看板にかけることはやめてサ……　宗教の精神ある敎師が、その勢力で間接に宗教を染み込ませるといふ樣にしなけりア、いかんよ。しかし。これは言ふけれども、仲々實際は六ケしくッて、行へないことだからナー……。

◉夜會といふものは、大低男も女も一緒なものだがナ　或る時男と女を別々に分けた夜會があッて、この私しが、その女の方に入れられたのだ。そうすると、丸で呼吸が解らんでナ……非常に困ッたよ。女の仲間に行くと流石の私も丸で無言になッてしまふか、非常に縮るのサ。その時なんか、三四言話したら、顔が熱くなッて來て氣が遠くなッた樣な心持がし

たよ。ドウも女の仲に這入ると、この腕もトンと揮へんてナ。

●歐羅巴だからッて同じで、やッぱり女ばかりが寄ると、時候の挨拶だとか、着物の縞の話だとか外部ばかりの話をして、何も面白いことはないよ。ドウも女は御免だ。

●あア女をおだてて亞米利加あたりでは、男も困ッてるだらふといふのか……亞米利加のことは知らないがナ、外國の夫婦喧嘩の餘計なのには驚くよ。歐羅巴は丸で夫婦喧嘩の巣窟といッてもよい程サ。日本の家庭の方が遙に善いよ。殊に昔し風の家庭の方がよいよ。

●今日はお蔭で大變面白かッた。またお出でよ。

* * * * *

門を入り坐敷に通る時までは、極冷めたい記者根性で、鵜の眼、鷹の眼觀察心に滿たされてゐッたが、四時間ほどの間、終始絶え間なく談り續けて敎を受くれば、何となく辭し去るのが名殘惜しく、我が胸中には、温い春風が吹きたッて、フロラの神が灌ぎ給ふ甘露でも味ッた樣な心地がした。玄關を出でゝ門の邊りに來れば、何か後ろより我れを呼びとめる樣な聲がする。もしや忘れものにてもせしためかと、身の圍りを調べて見たが、別にそんなこともない。多分耳のせいだらふと歩を早めて行けば、益々其呼び聲が高くなる。ふり返ッて見れば、當年七十八歳になる先生の御老母が、椽頭に立ッて『青柳さん〳〵』と、聲かけ居られたので、我れのふり返るを見るや、一寸一揖せられた。我れは、益々名殘惜しき心になッて、この冬期休業には、是非再び訪問せんものと決心した。京に歸りて後數日、何となく床しさの餘り、我が是までの簡單なる履歴と思想の變化とを書き認め、それに近く出來あがッた我が子の寫眞とを添へて、感謝狀を送ッた。その寫眞の裏に認めた文字は正に左の通りだ。

呈　中島湘煙先生

明治卅二年九月

青柳猛の息子とかいふもの

誠　卅二年五月廿二日生

○朝　顔　　　　露　草　子

白露の散らぬ間をのみいのちにて垣根にさける朝貌の花

○五月雨

さみだれの心の雲をいかにせん霽ろるひまなき我思かな

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

痴漢駿馬に跨り、佳人醜夫に倚る

世の實相の隨意ならぬ故にこそ、詩歌小說に書かれたる戀愛の斯くは讀む人を動かすなれ。若し有ふれて人の目に慣れたるほどならば、世上何とて可憐の艶話をうたわんや。蓋し、才子の佳人を娶り、淑女の大丈夫に歸ぐとは、大方、理想にのみ浮びて扨て實際には稀有の事なり。苦々しき哉、世間の情態。眞とに恰好なる伉儷とては少なく、內實の眞に睦ましきは、只だ指を屈するほどなり。凡そ、年少空想の輩らが、たゞ思慮に浮べて樣々に心に畫くとの大抵實際に合はざるは、珍らしからぬとながら、空想の中の空想、慾の中の慾とも云ふべき戀思情愛の架空談に乘せられて、偏へに花と醉ひ、蝶とのみ慕ふ人の憫れさよ。眼を擧げて見よ、世の何處に實際の好夫婦ある。

先づ、姿、形の外形に就て考がへ見よ。美人を伴ふものは、大抵、醜男子にあらずや。途上、幾多の羊に遇ふ。佳人がむくつけき男子に伴はれゆく姿の、宛がら屠所にゆく羊と見ゆる故なり。左れど、怪事は之のみならず、美男子、好丈夫の屢ば、豕の如き女子に伴はるゝを見ずや。閨閥の故か、一時の坐興の引かゝりの故か、養子なるか、免かれがたき惡緣か。よくも〳〵柔順に鄭重に得意らしく相伴なつて行くとよと感心せらるゝ男子多くあるに非ずや。

肥滿の女、脊ぎすの男に連立ち、堂々たる偉丈夫、豆の如き小女を連あるく、寧ろ滑稽にあらず、實際なり。色の黑白を較べよ。顏の方圓を較べよ。髮の濃淡を較べよ。相伴ふ男女の甚はだしく懸隔する、一に何ぞ如此甚しきや。

夫れ、心の同じからざると、面の同じからざるに似たり。心理界の常例か亦た外形の趣むきに均しきか。氣品、力量、人物などの夫婦相ひ適ひたるは、世に多くなし。况んや、情感、理想の合一せんものに至つては、殆んど稀なり。

但し、平凡乃至中等の男女に於ては、相合ふもの、存外に少なからぬとなれど、非凡、卓越したる男女に於て、妙に相適せるものに至つては、今古殆んど稀なり、昔しは、才女にし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、天才の妻となる勿れと書き殘せしものもあり。又、美男好丈夫にして、女運悪しく、自由を重んずるの國士にして而も離婚しがたきの不自由を痛擊せしものもあり。凡そ、少しく飛離れたる男女にして、奇遇好緣の相手を得たるものは至つて少なし。古今多くは、其の薄運に泣く。こゝに於てか驚ろくべき詩歌あり。詩歌に佳人才子相伴ふものの多きは、如此き不平家の世にのこし、世に訴たへし、裏面の理想、切めてもの思ひ立ちならんのみ。

何故に、卓士、烈女は好緣を得がたき乎。他なし、調子外れにして、尋常の思惑に合せざればなり。笑わずんば、道とするに足らず、道士は世より笑わるゝものぞ。如此く、卓士、烈女の自から期し自から約する所は、世に異なる。忽然として常規を外れ、突然として直情徑行す、尋常の人の解しがたく、嫌ひ易きは、固よりなり。

傳ふらく、大隈八太郎(今の重信伯)長崎に居て、今の副島伯と同もに遊興す。八太郎、豪奢快散、頗ぶる衆の喝采する所となり、副島氏獨り不可なり。八太郎、問ふて曰く、君、閨中に於て妓と何事をか語ると、副島氏曰く、仁義道德を談するなりと。是れ或は一場の座談なるかを知らずと雖ども、吉士の人に好かれざる、往々此邊の消息による。昔し、孔夫子の家庭の如何なりけん、史之を傳へず。左れど、女子と小人と養ひがたしと言へる一句によつて、略ぼ其平生を察す。凡そかゝる述懷は、冷淡なる場合に於て放言しがたきものなり、他人の女子を評するに於では、中々に暴りに言はざる所ろなり。孔夫子、よく人情の機微を知り、亦是れ一個の通人なりと雖へども、其夫人と團欒和樂するの余裕惰容は乏しかりしならん。幾度か、其の不平澁面を受けしとなきにあらじ。希臘の哲人ソクラテース亦た同難にかゝれり。惟ふに此等の人の斯る女難に會へるは、偶たま以て其の人品の卓然として高逸せしとを示し、併せて先生達のあまり家庭に於て和樂せず、寧ろ勉强に過ぎて面白氣なかりしとを察するに足る。

或ひは、愛國の志士にして、妻に畜財の僻あるもの。獻牲傳道の火に燃えて、妻に俗氣紛々たるもの。大公無私、唯與へて唯だ散ずる快男子に、卑吝なる妻あるもの、世に於て屢ば實見する所なり。妻の御しがたく、家門の化しがたきにより、直ちに男子の力量を疑ふなどは、人情の機密を知らず、世

の實際を辨まへざるものなり。

吾人は、女子が男子に無禮なる扱ひを受くるに憤慨するの度々なると同もに、吉士が家庭に於て劣女に苦しめらるゝ悲惨に泣くそも亦た度々なり。是れ此れ單に其女の悪しきにはあらず、只だ識見の達かざる故なり。郎を思はざるにあらず、思ふて彌よ其の不利益となるものゝ如き、豈に人世の恨事にあらずや。

左れど、深思あり、熱情ありて、あは〳〵しき薄片男子に結び付けられ、不甲斐なく、意氣地なく、氣慨なき卑劣に血涙を溶りつゝある女子も亦た悲しからずや。交際に通じ、人にうたわれ、地位も上り、世に時めくと雖ども、惜しむべし、一物を欠く、即わち本性眞實ならずして只だ淺墓なる彼男子に身を托せざる可らざる可憐の婦人を見よ。其の親は喜こび、其友は羨やみつゝある下に、彼女は獨り涙に泣き明すを聞け。女子にして男子を見る。氣慨なく、抱負なく、眞實なき男子ほど卑しむべきはなし。勇氣なく、熱情なく、濃やかなる心切なき男子ほど、頼毋しからぬはなし。理想なく、守る所ろなく、守張する所なき男子ほど、有がたからぬはなし。夫れ、心得ある深き女性にして、此等の男子に結托す、不平、恨思、知るべきなり。

つら〳〵双方の悲事に觀じ、左右の歎きに哀れを催ふして、身一つを泣くものは誰ぞ。夫婦とは何ものぞ。婚姻とは何ものぞ。離婚の不道理は、何等の限り迄で、有力なるや。凡そ此般矯激せる思ひに心をかき亂すは、免かれざる所なり。

左らばとて、春に花あり、家に煖爐あり。世と人と必らずしも冷たき悲運にのみ會ふものにはあらず。必竟は、婚姻を忽諸にすると。婚姻前、男女相知ことの少なきと。知るも辨ずるの智識經驗の乏しき故とによると多し。其の弊を救ひがたきにあらず、救ひの道、固より講ぜざる可らず。

只だ一概に女權を擴張すると稱へて、女に無益なる空想をのみ抱かしむるは、眞に女子の友にあらず。女子教育の秘機に練熟して、人を見て法を説くの活手段なきときは、偶たま以て婦女子を苦しむる種をなならん。

左れど亦た、天才あり、力量あり、熱情ある非凡なる女子を、小人同樣に見做し、其の稀有なる情操を開展せしめて、恰好の地位と平和とを得せしむる工夫せせず。一概に冷淡なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

理屈に拘つろひて、世を器械的に盡一せんとする杓子常規論の爲に、吁、幾多多數の女天才が事實に於て自殺しつゝありと知る乎。

男子の無禮

いやらしき男子ありて彼此と言ひ寄り、斥ぞけても、辱しめても尚ほ彼此と附けまとふとなどあらん時、女子たる身に於て覺悟すべきとあり。必竟は其の氣品烈しからずして、決死節を主張するの精神足らざればこそ、斯る無禮をも蒙むるとながら、我國の如き醜風橫行の街には、亦必らずしも左る故にのみ由らざる事あり。所詮は、男子、女性を敬重せざる故と、社會の輿論に於ける女性の勢力乏しき故とに淵源せずんばあらず。如此き際、女子は我ひとり胸につゝみ成るべく他言せじと力むるとあり、之れ一つには我身の恥となると掛念する故にも由らんが、爲めに反つて誤まりを大きくするとなきにあらず。もし凛然として他を威壓するに足る氣品だにあらば、斷じて斯る無禮は受けまじと思ふの心、直ちに自から恥づる基ひとなりて、則はち深く秘し只獨り苦悶することもあらん歟。是れ尚ほ一を辨まえて二を思はざるとなり。左程に苦慮して獨り勘辨し、たゞ一己の力にて直ぐに擯斥し去るとの出來なんには兎に角、既に幾度か其の無禮を受けて尚ほ之を禁止するとを得ざるほどならば、寧ろ、斷然たる處置を取つて彼れ男子の躰面を痛擊し、一に自から保護すると同もに、併せて女性全躰の面目を維持するに及かず。優柔として久しく耐え、遂に其の悔を禦ぐと能はざるほどならば、必らずや、疑惑其の間に入り、他日意わざる災を蒙むるともやあらん、必竟は覺悟の足らざる故なり。

夫れ、痴情に驅らるゝは寧ろ憫れむべし。男子、女性を見て敬重せず、玩弄して其の慾をほしひまゝにせんとするこそ、惡むへきの極なれ。女性、世に立つ何の甲斐ぞ、學を爲し、力を盡す、何等の目的ぞ。もし身を挺して同性の地位を高かむるとを得ば、死すとも亦可ならずや。久しく恥を受けて尚ほ決せざる如き、抑そも身を擲さげて義に盡さゞるの致す所ろなり。

然し乍ら、茲にも亦た輿論の偏頗なる由縁現はれたり。何事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の起らん時にも、先づ女性を責めて男子を後にするの僻あればこそ、やゝともすれば女性屢ば斯る不道理の謹愼に陷いるとなれ。之より後、男子、女性に對して無禮の處置あらん時、其の女性の直ちに之を發表し、公告し、痛罵するをもて、寧ろ當然の女德と見做すに至らんとを勸告す。此れ是れ方今男子横行の世に於て、其の無禮を制御する一種の投毒治療法ならん。

教育界の惣失敗

維新以後、觀るに足るべき事蹟あると少なし。只但だ、西郷勝、大久保諸先輩が遺せし惰力に隨身し、瓢然、勢ひに托して進步の外形を見めす。素と、自任あり修養あり根抵ある精神の發動より起源したる者は至つて稀なり。眼を擧れば、一代大率ね醉えり、皆な蹣跚として流行の踵に尾す。奈何んぞ、卓然たる獨自一己の識見を聞くとの少なきや。滔々たる大波、只だ單調にして單色なり。

憫れむべし、宗教界、教育界、亦又た依然として衆愚の歩趨に伴隨す。もと是れ人心の根本より革新し來るべき二大事業も、空しく俗流の鼻息に窺がつて、只だ其の指動の儘に盲從せんとす。世を改造せんとするにあらず、世によつて製造されんとす。宗教、教育の振はざる素と當然の數ならずや。

聞け、教育界近來の憫れむべき歎聲を。何んぞ、其の聲の悲しくして而も愚なるや。今の教育者は、一言して二つに大別す。一は、空想にして痴なるもの。二は、失望にして愚なるもの、是なり。先づ、其の失望の徒に付て耳け。

彼等は殆んと教育策に失望し、前途如何んせんかと疑惑せり。彼等は實に教育なるものゝ効能なきとに、あきれ果てたるなり。書生、命に服せず、少しくも善進せず、德育殆んど行はるゝとなし、彼等は正に手の着け所ろなきに當惑しつゝあるなり。則はち、彼等が救濟策として立案する所の方法の如何に可憐なるかを看よ。

或者は曰く、願くは　陛下が教育に關する勅語を再たびし玉はんとを奉請せん。

或者は曰く、願くは　陛下、上官上輩を招集し、其の道德を嚴そかにすべきとの勅諭を下賜せらるゝとを得ん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或者は曰く、各校に校長以上、別に模範たるに適ふべき人物を置き、其の薫化を受けしめん（而して、其人なきに困まるとて當惑せり）

或者は曰く、毎週一回、教育勅語を捧讀せん（而して、現に毎月曜に當番の教授之を捧讀しつゝある學校もあり。躰操教授に至る迄、當番の際は之を捧讀し、而して之を以て德育の威嚴となす）

嗚呼、これ當代德育新案の標本なり。是れ寧ろ教育なる者を知るものゝ言ふべき所ろか。痴にあらざれば、俗なり。亦た評論するの價値なし。

翻つて、宗教的教育界なるものを見るも、依然として世俗の流弊圏内にあり、未だ其の超然として脱越せし氣品あるを見ず。近くは、文部省、教育宗教分離の訓令を發するや、寧ろ學生の減ぜんことを恐るゝとも、所信を曲ぐるとの恥辱なるを懼れず。曰く、資格。曰く、連絡。曰く、懲兵猶豫と。もし此般三四の掛念憂慮を除かば、今の宗教的教育者の胸中にだに、他の深憂はあらずと見えたり。

更に彼の痴なる空想の輩に至ては、寧ろ一笑すべきのみ。遠からずして失意困顛せんとは明々たりと雖とも、其の未だ實事に經歷せざるが故に、暫らく架空の妄想を書く。凡そ、教育なるもの、如何程迄に効力あるかを大悟せしものにあらざれば、同もに其の經重を辨ずるに堪へず。甚しく之を買ひ冠ぶるものと、甚しく之に失望するものも、其稚なるに至つては相似たり。又若し吾家庭に於て單だ二三人の愛子を教えてだに、如何に其の深憂にして不可思議なるかに思ひ到らんときは、他の人の子を教ゆるに當つて、戰々恐々、憂ひて止まず、任じて足らずとする所のもの無くんばあらず。然るに、教育を見ると會社の如く、只だ其の株金の多からんことと、出入の夥たゞしからんことと、評判の高からんこととを求むと云ふ。教育の道を知らざる、既に明らかならずや。

嗚呼、維新以後の事業として觀るべきものあらず。大率ね皆な當座の間に合せに過ぎず。其の三十年間に畜積せし潛勢力を敍長し、其の從來の方針のまゝに次第に開展せしむるに可なる大事業は、何處にありや。皆な之れ一新して、其の誤りを正し、更に新生命によつて復活せざるを得ざるものゝみにあらずや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此時に方つて、獨り敎育界の失敗をのみ咎むべきにあらず。而も、敎育は、万事の淵源、人心の根抵なるが故に、此の方面に於ける同一の通弊あるに至つては、更に一段の悲慘を感ぜざるを得ず。嗚呼、明治年間過去の敎育は、大抵、失敗の歷史なり。現在の敎育は總べて失望と空想の茶番狂言なり。有志最早や警然として覺醒すべき時節にあらずや。

夫れ、人を敎ゆるは、自から敎ゆるの結果なり。自から疑がつて後ち悟り、喜々として其の悟を傳へざるを得ず。自から聞きて後ち知り、鮮々として其の知に樂しまざるを得ず、敎えて分たざるを得ざるなり。敎育の事、如此くして初めて生命あり。人を敎ゆるものは、自から信ぜざる可らず、普天の下、率土の上、獨自一己を確信して、毅然として獨立し、而して後ち衆生を率きゆ。敎育の事は、大丈夫の事なり。阿世曲學、權家に媚び、勢力に屈し、富者に委類するの徒の能くする所ろならんや。若し、校舍なくんば、田野に敎え、田野なくんば、山林に敎え、來學者なくんば、出でて勸告し、聞かずんば、促らへて說法す、何んぞ吾に乏しきとを憂ひんや。曰く、諸生を募集す。曰く、速かに來れ、束修を許すと。敎育者の自から重んぜざる斯の如し、何んぞ師道の行はれざるを奇しまん。

嗚呼、現時の病根は略して二。即ち、一に、人心惷靡。二に、敗政困難。左れば、一代人心の指導に任ぜんとするほどのものは、少なくとも先づ此の二大病根に向つて、大膽なる治術を施こすべし。苟しくも、精靈人心の事業に關與せる徒輩にして尙ほ之を救はず、反つて其の病毒に感染して亦又流行の勢ほひを助長すべき筈ならんや。敎育者にして氣餓ゆれば、衆いよ〳〵餒えん。敎育者にして、金錢を崇拜せば、衆いよ〳〵乏しとせん。今の敎育者は、特に卓然として表標し、精靈煥發、志氣伸張、氣を以て國民を率ゆるの慨あるべく、併せて財政の爲の奴隷となるなかれ。

吾女學界の同人に告ぐ。女學界は常に男學界の轍を履むものなり。男學界に行はれたる經歷は、十年(後るると一期)にして均しく女學界に行はれ、男學界の余波は、五六年(後るると一週)にして均しく女學界を打つ。左れば、今の女學界一時の盛況に醉ひて、他日、今の男學界に於ける悔を爲すとなかれ。般鑑、目然にあり、仔細に念ぜよ。

雑録

海舟先生高話

（綴海舟余波。禁轉載）

◉長崎の傳習所へ居る頃など、始終、目付と其下役とが、一々取締るのだ　夫で、此方などは、蘭人と話をする時に、其下役が横に附て來て居ると、ひどく目付の惡口などを言つてやる。通詞がまご／＼して譯さないと『己が片言で言つて仕舞ふぞ』とをどかしてやるのサ。ダカラ、「今日はだれだ、マタ勝か」と言つて、恐れて、仕舞には、附いて來なかつたよ。

◉△△が奉行の時に、「航海の稽古が、そう短かくて、直きに歸つて來る樣では宜しくない、もつと遠く迄行つたら、ドウダ」と言ふから、『そうですか、夫では左樣致しませう』と言つて、△△を乘せて、今日は遠く迄で行くのだと言つて、ひどい目にあはせてやつた。風が立つて、波が荒いものだから、△△が、「こゝは何處だ、もふ歸つては」と言ふから、『どふして／＼、此處はまだ天草から五六里です、之からズッと向ふ迄、行くのです』と言つたら、「モウ、ヨイ／＼」と言つて、大層、ヘドをついたよ。

◉○○が奉行の時もソウサ、八釜しく言ふから、甲版の上に床騎を置いて、夫に腰かけさせて置たら、イヤ引くり返つて、頭から血を出すから、大騷ぎサ。

◉サウサ、傳習所には、三十人も居たよ。夫は、幕府から遣はされたものサ。藩々から來たものは傍聽するので、中には願を出したものは質問もした。それらは、奢つたものサ。佐野が其の頭取だつけ。

◉毎日八時から十時、二時から四時と、二度づつ、學科があつて、學科が六ッサ。航海、測量、帆前船、算術、地理、天文と云ふやうな工合サ。夫が、敎師がボールドに書くのを、通辭が反譯するのダ。筆記もさせない、暗誦サ。そして翌日は前日のを聞くのだ。夫で、三十人の中で、出來るものは、少ない。ダカラ、年長のものなどは、追々變つて、若かいものになつた、そして筆記をさせるとになつたよ。

◎ワシは、二ケ月程すると、話しも出來るやうになつた。聞くとは、前から出來た。かはりの時に、己は頭取にせられて、

任せると云ふ事になつた。

◉奉行が書生の取締を八釜しくしていけない。△△などは、門に錠をかけるのサ。夫で、皆なが困つて、夜になると、屏を越してゆく。中には、松の木に船につかふ綱をかけてブラ下る。スルト、榎本だつたよ。屏の上の忍がへしをこはして、夜、大變な音をさせて、大騒になつた事がある。己は、夜自分が出るのだからと言つて、錠をあけさせて、叩きこはしてやつた。○○にそう言つたのだ『技術が出來れば、ソレデ善ふ御座い升。藝が出來るか出來ないで、お責めなさい。ソンナ小節で、かれこれ言ふべきものでありません』と、ひどくいぢめてやつた。

◉○○が奉行の時もソウサ。夜、ワシラが天文を見て居ると、其下役等が、まねをして、屏を越して遊びにゆくのだ、ソレデ、己が奉行に掛合つて、『アナタは、書生ばかり、遊ぶ様に言つて、不取締の樣に仰しやるが、決して書生等斗りヂヤアありません、もし御用ならば、引捕へて出しませう乎』と言つたら、『實は、困るのだ、お前が穏便にしてくれ』と言つたよ。然し、己は女郎買はしなかつた。夫で、治まつて行つたのだ。教師などは、士官をつれて、バツテーラで、丸山へゆくのだもの。

◉ソレデ、「勝は、亂暴で困る〳〵」と云ふ評判が、大變だつたよ。然し、ワザは出來ると云ふ評判もあつたのだ。アレデよう追拂われなかつたものだよ。一翁や、岩瀬などが、引きで出したからか、知ら。

◉ソレニ、阿部伊賀守が蘭學者を雇いたいと言ふ所ろが、其頃はモウ諸家に抱へられて、『誰もない』と言ふので、ワシの所の熟頭の杉亨次が二十人扶持でかゝへられた。

◉杉は、長崎で、按摩をして居たものだ。長屋の酒屋の孤兒だ。江戸へ來て、學資が無いと云ふので、己の所へ來たから、『己は困るから、一分シカやれないよ』と言つたら、「何でもいゝからと」言ふので、一分やつて塾頭をして居たのだ。ソレデ、按摩の末だと言つて、人が嫌つて居て、用いられなかつたのが、二十人扶持になつて、此方よりは、上サ。阿部の方から、「お前に不自由をかけるが、お前さへ、承知なら、明日からでも雇ふ」と言つて來たから、『善いも悪るいも無い、人の出世の事だから』と言つて、直にやつた。ソレデ、杉も

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

居るしチ、マンザラ泥棒だとも思はなかつただらふよ。

永源寺遊記

琵琶湖畔にて　岩野泡鳴

永源寺は江州に於て觀楓第一の勝地と聽き、去八日公用を帶びて彦根愛知川等へ出張の途次、道を轉じて之に向ふ。八日市より車を賃し、東に走ること三里、山上村に至り、小石落々たる川を渡つこ、高量村に着す。今年の霜氣は、如何にしけん、十日を速み、時節既にその半ばを過ぎたり。

夕暮の面影、尙もみぢ葉の色に照りて、山徑に赤子の掌を散り布ける上を踏み分け、大歇橋を越え、羅漢坂を登りて、この古刹に達す。山門を入れば、直に古色凄然たる鐘樓の建てるあり。左に添ひて監寺寮、紀綱寮、本堂等の棟簷入り違ひて延長せる所、淸き慢幕を張り列ねて、結構最も壯嚴なり。庭前こと更に落葉を拂はで、却て錦繡の筵を敷けるかと疑はる。房に就て一夜の宿を乞ひ、一僧に導かれて、本堂の傍なる閑室に入りつ。

瑞石山永源寺は、臨濟宗一派獨立の本山にして、現管長を久松琢宗といふ。入浴食事の後、刺を通じて、謁を同師に乞ふ。今晩は疲勞し居れば、明朝に致したしと傳へ來りぬ。即ち、弟子僧一二と參禪の事を語り、彼等の去りし後、借り置きし寂室錄を開て、之を閱す。同書は當寺の開山、圓應禪師寂室和尙の作なり。味ふに足るべき詩句少しとせず。偶作と題して、

即心即佛鏡裏像、　非心非佛火中氷、
雨過雲間倚闌眺、　遠山無數碧層々。

とあり。その「水車」を歌ふを見るに、曰く。

奔流光裏機關立、　便轉曹溪大法輪、
器々相傳無異味、　群生一洗濁心塵。

是れ佛者のおのづから喚起する想像なるべし。又、夢中兩句を得、覺めて之を續けし詩に曰ふ。

人生倏忽同露電、　計較何曾徒自瞞、
萬事隨緣胡亂過、　飽餐白飯看青山。

「飽まで白飯を餐して、青山を看る」の句、無味淡白、而も無限の妙趣ありといふべし。人をして一種の幽境を觀ぜしむる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

力を備ふ。梁川星巖之に和せしものあり、曰く。

　人生露電髩毛班、　尙在勞々擾々間、
　可レ羨阿師無二繫累一、　飽二餐白飯一看二青山一。

　翌朝早起して、寺僧朝の勤に急がはしき頃、ひとり庭前に出でゝ、境内を徘徊するに、わが昨夜宿せし本堂は、世繼觀音を安置せる所なり。次に清凉窟あり、即ち坐禪する所とす。開山塔あり。標月亭あり。後苑に入れば、青苔深き所、甘露水あり。芭蕉の葉陰にありて、小僧の之を汲めるに遇ふ。之に道を問ふて裏門を過ぎ、大樹欝々たる間に通ずる一條の難路をたどり、枯葉細石相重なれる上をすべりつゝ、進むと十餘町。眼界開けて、兩岸相まみゆる碧流のほとりに出づ。一方の巖上に立つて、左右の山々を見渡せば、見ゆる限り錦雲靉靆。その燃ゆるが如きは、忠誠の人の腹わたを列ねたるに似たり。

　それより舟に乘つて、早き流を下る。音無川は即ち愛知川の上流なり。奇巖妙石兩岸を疊み、古色、霜錦を冠して、曲淵に臨む所、仰ぎ見れば、高野山腹、翠紅相交はれる間より、永源寺の樓閣、突兀として隱見するあり。われ、先に高雄の幽谷を眼下に臨み、今や高野の絶景を水上に望む。孰れ劣らぬ佳境に、かゝる虛寂の場を開きし人の心事、豈床しからずといはんや。

　再び山を登りて、朝飯を喫し、寺僧に伴はれて、含空院を見る。開山禪師示寂の跡にして、管長の住する所なり。川を隔てゝ飯高山と相對す。永源寺はもと此山にありしを、當方に移せしものにて、當方を高野山と稱し、讃岐の金毘羅象頭山に似たるの故を以て、象尾山と名づくる由。苑あり。此苑中一小池あり、功德沼といふ。

　暫くして管長出で來る。年齒既に六十五六、柔和なると一見比丘尼の如し。而してその應答の無邪氣なる、恰も小兒に似たり。惇々として激せず、迫らず。以て一個の智識たるを證するに足る。たゞ恨む、わがいふ所屢々通ぜず、彼れの語る所また獨斷に過ぐるあるを。われ常に思へらく、禪徒の說は禪徒となりて、之を窮むるに如ずと。即ち他日の參禪を約して相別れ、再び一僧に送られて山を下りぬ。

　青雲の白き飯をば嚙みしめて、
　　紅葉の色に禪味をぞ知る。

罸を熱海の さまよひ日記《其五》

悪魔の子　有美

かの音に名高き箱根の『宮之下』といふも、この近くなるかと思へば、また何となく見舞ひたき心になりて、これよりは何程の道程よと問ふに、このあたりは旅人に慣れ居ればか、仲々の無愛想にて碌々詳しく教もくれざれど、塔之澤より大低は一里半なりと聽きつ。然らば、今はまだ十一時なれば上りて小田原まで歸へるも今宵は遲かるまじと、坂路たどるほどに、早や十二時近くにもなれば、我が腹の叫びは如何にして壓へんかなど考ふ。宮之下まで耐え行きて、藤屋などいふ旅舍に入るか、然らずとも小料理店に食事にてもせば、素より苦はなけれど、憐むべし嚢中餘すところ僅に一圓三十七錢一厘。これ實に三日の料なり。止むなければ晝食の儉約して駄菓子にてでも誤魔化さんものと、宮之下よりは、まだ半里ほど手前ならざる臺店に入れば、此處には既に若き男つれたる一人の老婦の息へるがあり。こは日本橋わたりなる呉服商のお袋とかにて、その多辯なる舌頭に、店の主人相手に語り出づる江戸談聽けば、日本橋といふは、その昔太鼓橋の形ちせるものにて、圓るかりしとのこと、箱根の山奥に大江戸の評判耳にするも、仲々興あることならずや。梨子三つと駄菓子二つ三つに澁茶啜りて、けふのデヰンナーとはなしつ。されど茶代とも總計十四錢置きたれば、さまでに安きものには非りけり。

驚きしは宮之下といふところなり。あるたけの町街道何となく横濱くさく、店頭には皆な洋文字多き看板出して骨董品細工ものなどの商ひする樣、宛然少さき横濱と云はんか。景色、眺めなどいふもの、露ほどもなく、今少しゆかば、何か觀るべきものあらんと進みすゝめど、遂に觀るべきものは一つだになし。たゞあるは、『帝國ホテル』めける洋ホテルと、嚴めしき黑門の旅舍となれど、我れには、ちとばかりの用さへなく、そのうち、町はづれめけるところに出づるに、『宮之下はこれぎりなりや』と問へば、『然り、これぎりぞ』と答ふ。これぎりの宮之下が、如何なれば此くまでも評判高く、都びとなぞの寄り集ふものにや、ちと合點のゆかれざれ。又町の入口に一軒の小奇麗なる茶屋めけるがあり。なかに、廿一二の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女の西洋束髪して、首の邊までおしろい白ろ〳〵と厚化粧せるが座れり。何物にやと怪しみながら、出しある盾板ながむれば、『旅人宿營業』としるしあるもをかし。これは、このあたりに來る舶來の艶冶郎など捕へて、悪業重ぬるものには非ずや。『白首』といふ語の眞義、我れけふこの女をのぞき見て始めて知りぬ。その身作り、如何にするも、我が日本向にはあらじ。

腰さへかくることなく、面白くもなき宮之下に心おとし引返へし急ぎ坂下り歸るほどに、何となく茶の欲しくなりければ、また半里ばかりの所にて、さる茶店に入るに、茶代せしめんとてか、老婆のしきりに菓子皿など運び出すも憐れなり。我がそばには、二人の駕籠舁ありて、煙管横くわへに息み居りしが『今夜は何所に泊りて、のち〳〵は何處まで行き給ふぞ』と問ふ。小田原泊りにて熱海行の積りなり、といへば、こは愚かなることなり、若し宮之下より其儘登りつめて、三里ならば、箱根の宿に達すべく、そのあたりは仲々に名勝多きところにて、有名なる葦之湖あり、箱根七湯あり、曾我兄弟の古墳などもあれば、こゝに一夜を過し、明日一里半を登り、

玆に某の嶺を越えなば、僅に五里にして熱海に達するを得べく、小田原と熱海との間を往きつ復りつする煩もなく、しかも、箱根諸峯の名所さへ探れて、一擧兩得の策ならずや。いざ、まだ日脚も高く宮之下よりさほどに下りしにもあらねば、又引返へして登り給へと。地理に疎きも困りたるものよと、我れも其心になりしが、『然しナ……名勝を見物するには、矢張り、人を一人雇はんといけませんわナ……。どうせ、おらァ……これから歸るのだから、なんなら安くして案内すらァ』と言けるゝまゝに、何となく俄に怖氣出でゝ、これがかの馬琴ものなどにお極りの箱根名産の雲助ならずや、もしも是れにかゝり合ひつけなどせば、飛んでもなくゆすり取らるゝこともあるべしなど思ひ煩らひ、今更の如く其男の顏見つめれば、小さきチヨン髷のはげ頭に、ねぢり鉢巻して、胸毛くろ〳〵と見せ現はせしなど、愈々薄氣味わるく、この茶屋の老婦の彼れに相槌うつは、必定同腹と知られたり。いで、あやうし〳〵と急に八犬傳中の人物めけるものになり上り、茶代二錢ほど殘して言を左右に出で去らんとすれば、相にくに銅錢の持合せなく、さればとて、かばかりの小甜みしか

いも財政危急の今日今時白銅置くも勿躰なしと、止むなく入用もせぬ草鞋一足、二錢五厘に買ひて腰のまわりにぶら下げ、釣錢の二錢半は、茶代にと殘しつ。兎角、もの全たければ、天地に詩歌はなきものよと聞けば、地理の不覺より此る誤りして、つまらぬ道筋取るも、我が旅びの詩趣を增すものなるべし。

折角箱根に登りしことなれば、お禁咒までにも、是非湯に入りて見んものと思へど、宮之下にては此の乞食坊主の入られそうのところ素よりなく、塔之澤とても又しかなれば、湯元にてこそ是非にと、とても上等浴室に入るなどの餘裕もなければ、その入口の所にて草鞋ぬきて湯壺の板の腐れたる如き下等浴に入りつ。流石は下等だけに、浴水の汚れ穢きこと限なし、出でゝ湯錢拂はんとすれば、湯守の影先方より少しも見えず、止むなくそのまゝにして、去りぬ。これが都なりとせば、無錢入湯などと騷がれ、撿事局送りなどいふ業さらしすべきに、如何に人の入り込めばとて、田舍はノンキなるものならずや。小田原に歸れば、五時の頃なりしが、この所は殆んと軒並に貸座敷あるところにて、道に遇ふほどの女ども、皆な女郎の面もちありて、商賣人か素人か、容易く見わけつかぬもうたてし。何處にか格好の宿屋見つけんものと、すゝみゆくほどに、高等師範の帽章つけたる一人の男の、友の男つれて歩むに遇へり。

（此編今後二回を以て終るべく、次號は全編中尤も興味多き部分なれば、願くは完結の長びくを宥るし給はんことを）

迷郷

天行雲士

禪定のゆかぬに餘念なく
心の月におくかゝる
わかき法師の膝もとを
かろくさひこふ蝶一羽
花のうつり香色そめて
黄あり白あり深みどり
紫雲をまねくこの蝶の
濃き情をややさすらむ
座禪の膝にやさかりて
眼子すかたのしほらしき

やごれろてふは戀か詩か
かたくささせる我胸の
佳人の愛にふれしごと
のさかにかよふ春の風

翼ひろけてうらうらさ
膝を離れて飛ぶをみて
浮れうかる身さ魂を
縛る座禪のつなきりて
跡を慕ぶてさすらひは
はるのおさめの束髮の
緑の野邊をかさふらむ
うす紫のはなすみれ
咲きにほひぬる草の上に
宿てれむるそのさまに
衣かたしきくさまくら
野邊の若草しされにて
蝶もろさも夢にいろ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○無我無慾なる大不平家

見聞するもの悉とく不平にて、一ッとして悦こばしきことてなく、日々面白からず送る。左りとて、女々しく悲しきにはあらず、况してや口惜しく、妬ましきなどにはあらず。社會の組織、其の根抵より氣に入らず、官位爵祿の差別、就中、癪にさわり、貧人小夫の冷やかに扱わるを見て甚はだしく腹立ち、我知らず心荒らぎて自づと粗暴の振舞するとあり。小理屈、格式、法律制度なんどは、わざとにも破り棄てたく、治安泰平など云ふとの馬鹿々々しく聞こえて、只管ら亂を好み、所詮、根本に刀を下すにあらざるより將た何をかせんなど怒り憤ふる。世は、斯の如き人を目して、一概に不平家と言ひ去り、他のもろ〳〵の不平家に並せて、輕く文明人士の一冷笑に附せんとすと雖ども、之れ甚はだ不可なり。不平に二種あり、我の其所を得ざるによりて平ならざるは、利己の不平のみ、彼、其の望む所を得ば則はち足る、亦何んかあらんや。然れども、社會の組織、人世の現狀等に對して不平あるものは、素と決して自己の爲にするにあらざる也。彼が痛感岑々たる深憂は、豈に一朝一夕にして拂ふとを得可けん。彼は蓋し全生涯を不平の焔にふすべ、骨を鬱悶の泥に埋め、死すとも倘ほ所懷を發現し盡すべき滿悅はなけん。豈に尋常執我の爲の不平なりとせんや。彼は天を仰いで祈る所あり、地に俯して哭する所あり、一生を達觀して稍や慰藉する所はあらん。然りと雖とも、其の胸痛の去りがたく、不平の散じがたきを如何んせん。但だ只だ此の不平散じがたし、則わち鬱勃として社會の根抵より新元素を隆起し來る。左れば、革命と云ふもの、皆な此の不平より發動し來らずと云ふとなし世もし此の不平なかつせば、遂に革命はなけん。遂に革命なきの世は、只だ將に衰老枯槁に歸せんとするのみ。故に、余は此種の不平家を珍重して、救世の新生命となす。

○優しき乙女心中の不平

女にして此に似たる不平家あり。初めの處女、世に矯激して、後に脫兎のすゐものとなりたるにはあらで、心優しく氣靜げ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きが内に、只何となく不平不滿に堪へざる質の女性なり。彼女未だ曾て冷やかなる待遇を受しにもあらず、其家庭に破裂なく、其の運命に悲慘もなきに、早く既に心中抑へがたき大不平のこゝちする、何故ぞ。他なし、其志、氣高くして理想超越し、偶として女と云ふものの哀れに思ひ到りて則はち此の痛恨あり。亦又、眼底に映ずる諸々の人、もろ〳〵の事、皆な虚僞浮薄に見えて、彼女の奥深き濃やかなる情感を充たすに足らず、彼女が悦服崇拜すべきほどの目的一つだを無き心地するに於て則はち此の不平あるなれ。左れば、此の如き大不平の婦人が、其の敬慕するに足るべき人を見てのち豹變いかに太はだしきを看よ。尤とも柔順にして尤とも平和なる婦人は、即はち此種大不平の女性が一變せし後にてありけれ。人心機轉の妙、眞とに麗はしき哉。

○倘早論、優劣論

世に『倘早論』、『優劣論』の二つあり。倘早とは、新たに事の起らんとする時、倘早しと云ふものなり。優劣とは、夫よりも彼の方優れり先にすべしと云ふものなり。双方ともに、新たに起らんとする其事を不可なりとは言はず、悪しゝとも言はず、但だ、未だ早し、此よりも彼の方をこそ先にすべしなどと云ひて、詮ずる所、隆起勃興の芽を挫くのみの結果を爲すものなり。而して、倘早論は、人心勃々として隆んに新事を成さんとする時に起り、優劣論は、人心萎靡、辛ふじて一つ二つの新事を起さんとする時に生ず。其の發生の時節は異なれども、害あるとは、一、同もに俗論たるを免れず。たとひ倘早くとも、其論既に起りたるは即はち當に試むべきの機なり、たとひ少としく早くして稍や機に先だつの損はありとも、其芽を挫き、其氣を抑さへて、生意を殺すの害には優れり。人もし倘早論を爲さんとするほどならば、其の倘早論を爲さゞるを得ざるほどの新事の未た起らざるに先だち、先づ機先を一轉せしむるを要す。彼既に此の先見を欠き、現に既に其の新事の起らんとすべき機會に接せば、たとひ吾心之を倘早とするも、其の起らざるに先だちて一轉せしめべき機先に後れたるを吾過とし、放任して英氣を發たしめ、翻へつて先づ其の害の伴はんとするを除くべき工夫に着手す、これ機後の機先にあらずや。身未だ此の責に任ぜず、徒らに論

議して他の英鋒を挫き、以て國家の生命を乏しくするは、國士の恥とする所なり。夫れ、人心積極に向ふの時すら倘斯の如くす、況んや、其の消極に困するの秋に於てをや。其の辛ふじて發動し來る一二の新事に向つて、徒らに優劣を論ずるが如き、尤とも不可なり。此よりも彼は優れるとすと言はんとせば、同時に此と彼とを行ふに及かず。汝もし人の爲さんとする彼事よりも、汝が言ふ此事を優れりとせば、須らく彼を助けて彼事を成さしめ、吾は則はち此の事に任じ、同時ニ個の新事を成すべし、これ人心萎靡の機節に際する救ひの活法ならん。人生、過誤多し、過誤を恐れて爲さゞるは、更に大なる過誤とす。今の時、人心喪敗す、當に志士躍然として各自所念の新事業に一着を試むべきにあらずや。

○冷性熱血

世は至つて廣し、年は甚はだ長し、人は極めて複雑せり、悠く々の情をもて、悶々の志を遣り、鋭氣を驅つて超然たる仙志を保つ。われは、人間の不可思議なる靈性を得たるを感謝す。

寄書

黄吻錄

舟畔生

一 寺院

さなきだに夕暮は悲しきものを寺院の晩鐘に接しては物の哀れを起さぬものはあらじ詩人の耳に響く寺院のベルこそ天來の詩靈なるめれ夕つ方寺院のあたりを逍遙するは詩歌の境にて心を練らん人のよき教課なり新古碑立並ぶを見ては老幼の故人に逢ふ心地して吾も亦世の務終りなば斯くなん成るさ思ふに何ごか忌む心の起るべき本堂の燈火かすかにして讀經の聲木魚の音に和して聞ゆるも哀れ聲ばかりして何れに形やある梟の那方の森に鳴けるもいさ哀れなり斯る境に默思する吾の疑い難きは此の世を假りの宿さ云ふ事なんめり

二 スキナ物

吾に親しき友ありけり送りこしたる寫眞の裏にスキナ物さ題して斯くなんありぬ候＝春、時＝朝、花＝櫻、樂み＝談話、天然＝山、音樂＝月琴、書物＝歴史、詩人＝景樹吾此れを見て面白き業なりさ思ひ其の後寫眞を送りける時候＝秋、時＝暮、花＝菫、樂み＝歩、天然＝大洋、音樂＝笛、書物＝詩集、詩人＝ウォヂズヂルスさ誌して遣りぬ其の時側に友ありて小供げなりさ笑ふ然れご罪なき遊びならずやさすゝめ置けり

三 故郷の森

一流の大河大方は水あらず小石清く芝所々に簇してけり塘に添へる一帶の森うらゝかなる大陽の光を葉に受けて綠の笑貌しつ小鳥を弄ぶ樣えも言はれず夕暮になり月は空に懸り風は葉に含まれて奏づる琴の音面白く夜に入りて光增す月影松の枝に宿りてなせる繪のなかしき琴は床しき人の手にのみ彈かるゝものかは繪は畫工の筆にのみ畫かるゝものかは至愛なる自然はさこしへに琴の音をたて繪を畫けり吾は此の詩境に生れたるを喜ぶ。

新刊書

○海舟遺稿

龜谷天尊君、海舟先生の詩歌を集め、海舟遺稿と題して世に見めさる。抑そも先生の吟咏、專門飾辭の事にあらず、但だ感慨欝勃する所ありて自然に發す、皆な世態人情に激するの余にあらざるなし。此を以て格調慷慨、風律勁健、必らず余韻あり、必らず含蓄あり、一唱三歎、識らず自づから諷世戒諭の幽旨に悟味せらるるもの、故ある哉。余は就中、其短歌と、五絶とに服す。歌に西上人の風あり、詩に栽菊先生の氣あり、余は當代專門の人に於て決して得がたきの風懐を領し、愛吟禁せざるもの也。此書大抵編入して遺す所少なし、同好の士用いて以て朝夕景慕の情を盡さば可ならん。序に副島蒼海先生の文あり、辭尤とも短、意太はだ長。曰く、勝君之立朝也恭謙自持、蓋有君子之風、若夫兩論並馳、辨難爭生、勝君常居中慰解、諄々、何其務也、外間所傳勝君大言放語闊髙、是或有之、余未識也、至使大將軍氏歸順、民免兵才、如其仁、如其仁。（發行所、東京芝、鴻盟社）

○平民の福音

此書一と度び出でて讀者感歎す。到る所、嘖々の聲あるが故に、余は復た長辭を用いじ。但た、筆者山室軍兵氏の熱誠に至りては、數たゝび贊歎するを禁せざるもの也。火の如く焔の如き君が舌鋒に曾て一度び靈感を刺されたるものは、夙に君が說教壇上に稀有の成功を遂ぐべしとは知りつらんが、其筆鋒の等しく亦た斯あらんとは、預期せざりしもの多かりしならん。今や君、文壇に於ても亦た優に一方の將たるを見めせり。余は久しく其の編輯に敬服したるものなるが、雜誌の名の餘りに奇なると、販路の少しく別途に偏するとをもて、讀書界、未だ大に其公評を聞くとを得ざりしに、如今、集められて此の一書となり、初めて燗燦して衆目を惹けり。寧ろ慶すべきにあらずや。余は君の文章に於て、古人屢ば唱道する所の教を實際に見たり。曰く、赤誠は文の氣、熱情は文の花。君が文は、文なるが故に文とならず、文ならざるが故に文となれり。（發行所、東京芝、南佐久間町、救世軍本營）

○小說、にごり水（前田曙山著）

現代の腐敗を寫し得たると同もに、法律を知れる巨惡の遂に免かれて、他の幾多の比較的可憐なる弱行者が哀れの末期を遂ぐる不調子を寫せり。固より是れ所々の事實によつて綴りたらんものなるへけれど、其の榮枯に感慨の情熱したるにあらずば、斯斗り眞しやかには書けぬものにて、比較的有力なる刺激を讀者に與えたり（春陽堂版）

○續當世活人畫（儘世翁編）

初篇に續く。此書の短所は餘り賞め過るにあれど、暗黑の側のみ發かんとする當代に於ては、寧ろ多とすべし。故に世人未だ知らざりし事實を記るして、名士閨秀の美を發揮する所、此書の長所とせん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◉歌御會始御題　來年の御題は「松上鶴」なり

◉早稻田の慈善婦人園遊會　大日本婦人教育會の催なる附屬女紅學校維持費醵金の爲め園遊會、去十八日大隈伯邸内菊花咲香へる處に開かれ、會者二千人、七分迄女子なりし。大隈伯の演說あり。眞に稀有の會と云ふべし。報知記者其の肖像を揭げ、伯が演壇の下只見る束髮丸髷の佳人謹聽する所を畫く。大隈伯の長廣告、此日此會の如きに於てせられしは前古未曾有なりしならん。

◉家庭學校　富岡幸介氏　不良少年の爲に巢鴨に家庭學校を起さる。

◉鐵道作業局の婦人採用　日本鐵道に於て各驛出札掛に婦人を用いんの計畫あるは、前號に記せしが、遞信省鐵道作業局に於ても官線各驛の出札掛に同樣に婦人を用いんの希望あるも先づ運輸部調査掛員（定員百二十名餘）に婦人を試用せんと調査中なり。

◉一村貞女の死を悼む　事は熊本縣八代郡吉野村大字吉本なる荒木叢督氏妻いれ子の爲なり、美談なる哉。

◉故松本荻江女史　の爲に來月二日午后に於て追悼會あらんとす。

◉尼僧中村智門及瀧村王子女史　大阪神戸にありて一千年前天竺に渡らんとして遷化せし眞如上人の爲に眞如會を組織せんと盡力中なり。

◉日本婦人矯風會員　每年意氣哀へず、今年も例に由り刑法改正、海外出稼婦女取締の二件に對し、兩院に建白せんと運動中なり。

◉割烹教場と料理品評會　石井泰次郎氏が割烹學校（京橋鈴木町）は單に割烹教場となし、又料理品評會を再興されたり。

◉遞信省告示第三百三十三號　萬國聯合郵便爲替事務約定に依る電信爲替を外國に於ける女姓受取人に宛て振出さんとする者は其爲替振出の請求を爲すに方り爲替願書面受取人の指定中に其受取人の何人たるやを明に決定するに足るべき身分、爵位、職業等を記載する場合の外氏名と共に成るべく夫人若は令孃の稱呼を記載すべき旨告示せらる。

◉普通學務局長より各府縣へ通牒　高等女學校の補習科及專攻科に關する件

高等女學校の補習科は本科又は技藝專修を卒業したるものをして更に其學科を練習し且其不足を補充せしむるに在り專攻科は本科を卒業したるものにして尙進て一層高尙なる程度に於て一科目又は二三科目を研修せしむべきものにして其本來の目的を同くせす從て教授の程度方法を異にすべきものに有之候條該科設置に際しては右の旨趣を體し兩科の名實混同せさる樣御注意相成度依命此及御通牒候也

追て高等女學校卒業の上小學校教員たらんと欲する者の爲に設くる學科課程の如きは本文の旨趣に依り補習科とせらるゝ方可然此段申添候也

◉秋田婦人學會　は大に基本金募集に着手す。

◉上越婦人修德會　は去五日、高田市光照寺に於て催ふし、東京よりは來賓三輪田眞砂子の婦道と題して演說せらる、

男女の學說（女子は惡人なるか）	時事新報（十月六日、十七日）
嗚呼、伊知女（豐前御許山、矢部村彌平妻）	中津新報（十一月、十七日）
女子教育	富士新聞（十一月、廿五日）
家庭に入るべき小說	万朝報（十　月、廿五日）
庖厨小言	人民（十一月、十七日）
日本國民猛省す可きものあり（家を守るは國を守るなり、一夫一婦）	時事（十一、二十）
强姦せられて自殺する可否	大阪毎日新聞（落葉籠）十一、廿二
大名の奥向（御守殿）	時事新報（十一月六日、十七日）
夫人の素顏（奥原晴湖女史）	報知新聞（十一月七、十一、十四、十五）
令孃鑑（九條節子姫十一月十五日。牧野悅子十一月八日。本多知子十一月廿三日）	（千代田日報）
御殿女中	千代田日報（連載中）
慈母の恩（石黑忠悳君の母）	同（十一月、十二日、十四日）
娼妓廢業事件、娼妓廢業認諾事件顛末、娼妓廢業訴訟遊廓の大恐慌起らん、娼妓假差押の紛擾（平田平三、ギルフ等）	光（十一月廿日）
各國の家族組織（吳文聰）	社會（第一卷第九號）
兒童研究と世間の父母（久津見息忠）	兒童研究（第二卷第三號）
戰爭の婦人、マタゴルタの女丈夫	日本赤十字（第七十九號）

◉女學雜誌　吾人の尤も興味を覺ゆる雜誌は一也。繙海舟餘波、滴々絕へず、隨感を讀まば、恰も遠士と膝を接して道を談するの情あり。有美君の激樂的議論、世間滔々たる道德的屑醫の嘻々囂々を招くは、素より恐るゝに足らず、ドシ〳〵遣り玉へと、吾人は勸告せずんば能はず（中央公論、十一月分）

◉鷗村子　米國より精細なる報道を寄せ來る、次號より揭載すべし。

◉社友中病あり死あり本號太はだ編輯延引せり、出版の期後れなん、之を謝す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故人の三書

故鈴木弘恭先生述

第七版 **百人一首講義** 一册二十五錢 郵税四

此書初版以來、甚たく愛讀せらる。百人一首講義多かる中に、信切・緻密に解釋したるもの、先づ此書を推すと評せられたり。歌道に志ざさん人、並に正月の樂しみに、心構えせん人たち試みに一讀あれ。又、年末年頭の贈品としては、表裝美くしく、極めて風雅の趣きあり。

故若松賤子譯述

第二版 **小公子** 一册二十八錢 郵税八

「小公子」既に世に定評あり。純潔可憐の讀物として、久しく推重せらる。此たび、英文原書も出版せられ、手易く購讀さるゝに付、もし兩々相列べて讀み玉はゞ、英語獨學、譯述參考などに助けすること多かるべし。

故海舟先生高談、巖本善治筆記

第二版 **海舟餘波** 一册三十錢 郵税六

富田鐵之介、木村芥舟の二翁、勝海舟先生に關する著作中の第一として賛賞せられ、筆記眞に迫り、之を讀んで目のあたり故伯に面するの心地すと言はれき。

以上三書 女學雜誌社、出版及賣捌

エフ、エチ、バーチット女史著

小公子

LITTLE LORD FAUNTLEROY
BY MRS. F. H. BURNETT.

上製美本石版密畫十數葉入全一册定價金一圓卅五錢郵税十錢並製クロース表紙美本定價金七十五錢郵税八錢

「バーチット」女史の筆は、流快にして眞に迫るを以て、其名泰西に鳴る、本書も亦女史の筆に成り、字々句々一として快ならざるはなく、頴悟なる小公子が、天眞爛熳にして無邪氣なる所作を、寫し得て極めて妙なり、英文學研究に最も適切なるの書なれば、師範學校、中學校、女學校等の敎科書として最適當の良書なり、

發行所
東京神田區雉子町卅二番地 岡崎屋
東京神田區表神保町二番地 中西屋

當校は來る一月より開校す當分の內入校すへき生徒は十人を限りとす其詳細なることに至りては本校に問ひ合さるべし

明治卅二年十一月

東京府北豐島郡巢鴨村大字巢鴨二千六百十七番地 家庭學校

東京府北豐島郡巢鴨村大字巢鴨二六一七家庭學校內 留岡幸助

山室軍平著

平民之福音

定價金二拾錢 郵税金四錢

左に此書に關する批評の一斑を擧ぐれば

本書は信仰燃ゆるが如き著者が、救世軍士官として多年の間働ける經驗と、沈思の餘に成れるものにして、極めて熱心に極めて眞面目に、而して其平易簡明にして譬話に巧なるは、恰かも鳩翁道話の如くに基督の教を說けり、余は其書を讀で神の力の特別に著者の上にあるを感ぜずんばあらず(毎日新聞)山室君が平民の福音を傳ふるに特別の長技を有せらるゝは普く人の知る所なり、君一度口を開くや穩波浩蕩盡る所を知らざるが如く、平易の語調を以て善く天來の福音を說き、熱涙熱血交々溢れて側々人に迫り聽者をして彼の眞氣に搏たるゝを感ぜしむ、此書說く所は君が口に唱ふる所を筆紙の上に移したるものにして、徹頭徹尾勞働者の傳道を目的とし、自ら序文に於て十七歲の時築地活版製造所の職工となりしを告げて勞働者なりと自白したり。思ふに君は辯說に於るが如く、筆に於ても確かに成効したる者なり(基督教新聞)熱情ある著者の言ふ所は確かに世教に稗益する所あるべし(大阪毎日)余輩はかく平たき物によりて御教の同胞に致さるゝを喜ぶ(護教)基督教の鳩翁道話又道二道話とも言ふべきなるを覺ゆ。平民に取りての神學書なり、說教たりと言ふべし(福音新報)

諸君、讀め此基督教の鳩翁道話を讀め

發行所 東京市芝區南佐久間町一 救世軍本營
賣捌所 東京市銀座四丁目 教文館
同 東京市京橋區釆女町 警醒社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY